

## 南フランス・ガール県南部のロマネスク聖堂（1）

### ーニームおよびボーケールとその周辺ー

中川久嗣

Les Églises Romanes dans le Sud du Département du Gard :  
Alentours de Nîmes et de Beaucaire.

NAKAGAWA Hisashi

#### Résumé

À la suite de la monographie précédente, je traite ici les églises, les chapelles, les abbayes et les prieurés de l'époque romane ou du style roman qui se trouvent au sud du département du Gard, surtout alentours de Nîmes et de Beaucaire. Ce pays correspond approximativement à l'est de l'ancien diocèse de Nîmes, et aujourd'hui au sud de l'arrondissement de Nîmes. Sur chacune de ces églises, j'analyse son histoire brève, sa forme, sa structure architecturale, ses sculptures, et ses décorations, etc.

本稿ではガール県南部（およそ現在のニーム郡 *Arrondissement de Nîmes*）の、ニームおよびボーケールとその周辺に点在する中世のロマネスク聖堂を対象とし、可能な限り知りうるものすべてを訪問・調査し考察を加える。聖堂の配列は、おおよそ現在の行政地域区分に準じて整理することとし、ガール県の県番号（30）、大まかな地域、そして自治体（*Commune*）の順で番号を付した。同一のコミューンに複数の聖堂がある場合は、「a. b. c. d.」というようにアルファベットで区分した。名称については、本文中で建築物としてのそれを指す場合はそのまま「聖堂」とし、個別的名称としては「教会」あるいは「礼拝堂」を用いた。また聖堂内にある《*chapelle*》は「礼拝室」とした。採りあげる聖堂は、基本的にすべて筆者が直接訪問・調査したものである。ただし私有地であったりアクセス困難な場所にあるなどの理由で訪問調査できなかった聖堂には▲を記した。それぞれの聖堂についての参考文献・資料などの参照情報は、各聖堂ごとに記したが、全体を通してのビブリオグラフィーは最後にまとめてある。写真画像は筆者の撮影による。誌面の都合ですべての聖堂の写真画像をここに掲載することはできない。

それらは筆者開設のウェブページ (<http://nn-provence.com>) で閲覧可能である。

### 30.3 ニーム (Nîmes) とその周辺

#### 30.3.1a ニーム／ノートル＝ダム＝エ＝サン＝カストール大聖堂

##### (Cathédrale Notre-Dame-et-Saint-Castor, Nîmes)

ニームはガール県の県庁所在地として、人口およそ 15 万を擁し、プロヴァンス・ラングドックにおいては、マルセイユ、ニース、モンペリエ、トゥーロンに次ぐ規模である。ガール県からエロー県東部にかけての山沿い地域にはガリーグ (Garrigues) と呼ばれる石灰岩丘陵が広がっているが、ニームはその東端近くに位置し、また古くからローヌ川に沿ってリヨンから南下したルートが、プロヴァンスからイタリアに向かうルートと分かれる (または交わる) 交通の要所でもあった。以下ではまず、ケルト時代から始まるニームの大まかな歴史について触れておこう。

このあたりでは、紀元前 6 世紀の鉄器時代の頃から人が住み始めたとされる。ニーム近郊で発見された「グレザンの戦士」(guerrier de Grézan) の彫像などはその頃のものである。紀元前 3 世紀頃、東ヨーロッパ方面から移動してきたヴォルク・アレコミク (ウォルカエ・アレコミキ) 族がラングドック東部に定着し、紀元前 2 世紀頃には彼らがカヴァリエ山 (Mont Cavalier) とその麓に湧く泉を中心に築いた街が、この部族の首都として繁栄した。街は、彼らが崇拜したこの泉の神の名前と同じく「ネマウス」(Nemausus) と呼ばれるようになった (現在のフランス語では「ネモズユス」と発音されたりする)。その後、マルセイユ (古代名マッサリア／マッシリア) やアグド (古代名アガテ／アガタ) などのギリシア系の植民都市との交易関係を結ぶなどしていたようである。

紀元前 2 世紀後半にこの地域に進出したローマは、前 118 年に属州ナルボネンシスを創設するとともにドミティア街道 (Via Domitia) を建設、イタリアからイベリア方面へと向かうこのローマの道はネマウススを経由することとなった。前 70 年頃にはポンペイウスによっていったんマルセイユの支配下に置かれるが、ガリア征服戦争 (前 58-51 年) に勝利したカエサルは、前 49 年にポンペイウスとの内戦に入り、その過程でポンペイウス派であったマルセイユを攻略し、その結果ニームはマルセイユの支配下から独立した。おおよそ前 44-42 年頃、ローマのラテン植民市となる。さらに前 31 年にエジプトにおけるアクチウムの戦いで宿敵アントニウスとクレオパトラを滅ぼしたオクタウィアヌス (後のアウグストゥス) は、エジプトからの退役兵たちをネマウススに植民させた。この時期にネマウススで作られたと見られる硬貨には、ヤシの木の下で鎖につながれたワニの姿と共に「NEM COL」の文字が刻まれている (これは今日でもニーム市の紋章の図柄に採用されている)。街はオクタウィアヌスがアウグストゥスとなった後もローマ植民市 (Colonia Augusta Nemausus) として繁栄を続けた。ストラボンによれば、その人口はナルボンヌよりも多く、しかも周辺 24 の集落を従え、これらの集落はネマウススに貢納していたという。実質的な支配地域は、北はセーズ川、東はローヌ川、南はサン

＝ジル、西はアレスやアンデューズ、そしてさらに今のモンペリエ近郊のカステルノー＝ル＝レヤラット周辺にまで至り、要するに現在のガール県のほぼ全域およびエロー県の東部を含む広大な地域をその勢力下に置いていたのであった。

ネマウススでは、紀元前 25 年以降、ケルト時代の泉の聖所の整備が進められると共に、アウグストゥス帝の娘婿であるマルクス・アグリッパの主導もあって、ローマ都市文明のシンボルである円形闘技場や神殿などが次々と建設された。それはまさしく「ガリアのローマ」と呼ばれるような繁栄ぶりを示すものであった。ローマ五賢帝の一人アントニヌス・ピウスは、父親のティトゥス・アウレリウス・フルウィウス (Titus Aurelius Fulvus) がこのネマウススの生まれであったとされる。

ネマウスス (以下、ニームと記す) における古代の主な建造物について、中世との関わりにも触れながら簡単にその概略を記しておこう。

およそ 220 ヘクタールに及ぶニームの都市域は、アウグストゥス時代の紀元前 16-15 年に築かれた全長 6 キロの城壁に囲まれていた。その高さは平均 7 メートル、厚さは 2 メートルあまりで、属州ナルボネンシスの中でも最も長く、また最も分厚くて強固なものの 1 つであった。城壁には円形、半円形、あるいは方形の 30 もの塔が一定間隔で作られていた。円形闘技場の南側には、1970 年代に発掘された城壁と円形の塔の土台部分が 90 メートルにわたって見ることができるようになっていたが、2000 年代になって埋められてしまい、現在はその軌跡を示すブロック石だけが地面に埋め込まれている。それ以外では、例えば 2018 年 6 月に、円形闘技場の西に新たに開館したロマニテ博物館 (Musée de la Romanité) の西側の中庭や、泉の庭園 (Jardin de la Fontaine) から西に延びるフランクリン・ルーズベルト大通り (avenue Franklin Roosevelt) とソーヴ通り (rue de Sauve) が交わる交差点からさらに約 50 メートル西進したところの南側の斜面などに、今でも城壁と円塔の土台を見ることができる。

カヴァリエ山の上には城壁の遺構でもあるマーニュの塔 (Tour Magne) が残っている。鉄道などでニームに近づく際にも、遠くからその姿が見える。ここにはもともと紀元前 3 世紀終わり頃から 2 世紀初め頃の鉄器時代にさかのぼるヴォルク・アレコミク族による高さ約 18 メートルの楕円形の塔が建っていた (ナージュのオッピドゥムの城壁と、建築技術が似ているとも言われる)。紀元前 1 世紀後半にその塔も高さが加えられ、それまでの古い塔を包み込む形で八角形の壁によって再建され、ニームを取り囲むローマ時代の城壁の中に組み込まれた。現在残るマーニュの塔は高さ約 33 メートルであるが、もとは 40 メートル以上あったと言われる。

ニームを囲む城壁に作られた門のうち、東側のアウグストゥス門と南側のフランス門の遺構が残っている。ガブリエル・ペリ広場に面して、サン＝ボディル教会 (19 世紀) の西側に位置するアウグストゥス門 (Porte d'Auguste) は、城壁と同じ時期 (紀元前 16 年頃) に建設された。別名アルル門とも呼ばれ、アルル方面へ向かうドミティア街道の出入口でもあった。中央には荷馬車や戦車などが通る大きな車線が 2 つ、その両側にはより幅の狭い歩行者用の道が開けられている。この門の両側には半円形の塔が作られていた。フランス門 (Porte de France) は円形闘技場から南西に延びるレピュブリック大通りを約 200 メートル行ったところで北側に折れて約 50 メートルのところに残っている。17 世紀まではスペイン門 (Porte d'Espagne) と

呼ばれていた。ナルボンヌ、さらにはイベリア（スペイン）方面へと向かうかつてのドミティア街道がこの門を通っていた。やはりニームを取り囲む城壁と同じ頃のものだとされるが、その正確な建設年代はよく分かっていない。アウグストゥス門と違い、今は半円形のアーチが1つ残るだけである。アーチの上の壁面には、とりわけ南側のそれに平たいピラストルが並んでいるのが見える。また門の南側の、向かって左隣に建つ住居の1階部分に、かつてこの門の左右両側にあった半円形の塔の土台部分の壁面が残されている。

ユゼス近くの水源から約50キロにわたって建設されていた古代ローマ時代の水道（紀元40年頃）は、有名なポン・デュ・ガール（水道橋）などをへてニームの北東部から城壁内に入り、ニーム旧市街の北に位置する要塞（1687年後半建設。現在はニーム大学のキャンパスが占める）の西壁の下に残るカステルム（Castellum）と呼ばれる分水施設に至る。この施設は直径約6メートル、深さ1.4メートルの円形の貯水槽で、そこから直径40センチの鉛管10本を使って町のそれぞれの地区に水が供給されていた。床面には水量を調整するための3つの排水溝がある。しかし3世紀には水道の管理が滞るようになり、使用されなくなってしまった。カステルムの導水路からは投げ銭が多く見つまっている。またこのカステルムを囲っていた壁の内側には魚やイルカの絵が描かれていたと言われるが、19世紀にカステルムに隣接する住居が取り除かれた際に失われてしまった。

ニーム旧市街の南端に位置するのは円形闘技場（Arènes／Amphithéâtre）である。紀元1世紀末（80-90年頃）に建設されたとされる。ローマのコロッセウムと同じ時期で、実際構造上の類似点が見られる。またアルルの円形闘技場と同じ時期か、そのわずかに後の時期とも言われる。外径は、東西133メートル、南北101メートルで、外壁の高さは21メートルある。内部の闘技場グラウンド部分は東西64メートル、南北38メートルで、最大で約2万4000人を収容した。建物の外部は2層構造で、それぞれに60のアーチ型開口部が並んでいる。それぞれのアーチの間には、1階部分は方形のピラストル、2階部分は壁付きの半円柱が付けられている。こうした構造はアルルのものと似ているが、1階部分の回廊（通路）の天井は、アルルのものが平天井であるのに対してニームのものは半円筒形のヴォールトとなっている。外壁上部には、穴が開けられた持ち送りが並んでいるが、これは日よけの幕（velarium）を張る棒を差し込むためのものであった。外壁には、東西南北の軸上に出入口として4つの門が作られている。上流客の席に直結していたメインエントランスである北側の門には最上部に三角形のペディメントがあり、そのすぐ下側には2頭の雄牛の飾りが付けられている（1階部分にもあるが、かなり摩耗している）。また西の門の1階部分の向かって右側2つ目のピラストルには、まるで馬に乗ってそれを操るかのように、女性が三つ又となった男性のペニスに乗る姿を表した彫刻が埋め込



30.3.1a Arènes de Nîmes

まれている（同様の彫刻はポン・デュ・ガールにも見られる）。東側上段の3つのアーチは現在でも塞がれたままで、2つ一組となったロマネスク期の細長い窓が開けられている。とりわけ最も東面のアーチのものは、同様の窓が上下2段になって開けられている。

円形闘技場（以下、アレンヌ）の観客席は34段の階段状になっていた。アルルのものよりもわずかに小さい中央の楕円形のグラウンド（トラック）部分では、19世紀に十字形の地下室が見つかっている。その地下室の壁には「T. Crispus Reburus Fecit」と刻まれている。この地下室の設計者であろうか。

アレンヌは、民族移動期以降5世紀になると、西ゴート族によって1階部分のアーケードがすべて塞がれるなどして要塞化された。西ゴートは6世紀半ばに本国をイベリア半島（首都はトレド）に移した後も、ラングドック（セプティマニア）は引き続き支配下に置いており、673年にはニームで反乱を起こした臣下を西ゴート王ワンバ（Wanba）が討伐し、その際、ニームの要塞化されたアレンヌを占拠している。8世紀のカール・マルテルのラングドック征服の後、カロリング・フランク王国の伯の居城ともなり、9世紀からは「Castrum Arenae」（Château des Arènes）として史料にも現れるようになる。12世紀になると、ニームはトゥールーズ伯の支配下に入り、アレンヌはニーム副伯（トランカヴェル家）とその家臣たち（chevaliers des Arènes）の居城となった。また13世紀になると、内部は一番下の階段席の段が埋められ、トラック部分には住居が建てられた。11世紀にはすでにサン＝マルタン教会（Église de Saint-Martin des Arènes）が建てられていたようで、19世紀初め頃にアレンヌの中の住居を取り壊した際に、このサン＝マルタンのものと見られる浅浮き彫りのパネルが見つかっている。このパネル自体は14世紀初め頃のもので、受胎告知や大天使ミカエルなどが彫刻されている。アレンヌには中世の間、2000人が住んだとも言われ、18世紀になっても700人が住んでいた。教会もサン＝マルタンの他にもう1つあったようである。なお19世紀初めから行われた住居の撤去は、学術的な調査などをしない無造作なものであったようで、そのため不明な部分の多い中世前期の居住などについての知識を得る機会が失われてしまった。

メゾン・カレ（Maison Carée／直訳すると「四角い家」）は、アウグストゥス帝治下の紀元2年から4年頃に、ローマのアポロン神殿をモデルとして建設されたとされる。1758年にジャン＝フランソワ・セギエ（Jean-François Séguier）が、かつてアーキトレーヴに2行にわたってはめ込まれていたブロンズの碑銘の文字を復元し、この神殿が、アウグストゥスの孫（娘の子）にして養子であったルキウス（Lucius）とガイウス（Gaius/Caius）に捧げられたものであったことを明らかにした。ルキウスは紀元2年に17歳で熱病にかかってマッサリア（マルセイユ）で死に、ガイウスはその2年後（紀元4年）にアルメニア戦役で負った傷がもとで死んでいる。アウグストゥスの娘婿であったアグリッパが亡くなった皇子たち（つまり自分の実子たち）のために作らせたと言われる。中世になると、11世紀以降は司教座聖堂参事会やニームの市参事会が所有し（Le Capitole）、さらに17世紀になるとアウグスティノ（アウグスティヌス）修道会の教会として使用された。大革命のあと国有財産として売りに出されたが、1823年

にニーム市が買い取り、修復も進められた。保存状態が極めて良好で、ヴィエンヌに残るローマ神殿 (Temple d'Auguste et de Livie) に似ている。

メゾン・カレは古代のフォーラム広場の南東角の位置に建てられている。南北の奥行約 26 メートル、東西の幅約 14 メートルの長方形で、およそ 3 メートルの基壇 (podium) の上に建っていて、その高さは 17 メートルある。15 段の階段を上ようになっている。基壇上の神殿部分は擬周柱式 (pseudo-périptères) である。



30.3.1a Maison Carée

北側ファサードの玄関柱廊 (pronaos/ vestibule) には独立円柱が 10 本、南側の外壁には壁付き円柱が 20 本並ぶ。ファサードのアウグストゥス期の円柱は、修復の手が入っているとはいえ、非常に洗練された見事なコリント式デザインとなっている。円柱の柱頭は上下 2 列の繊細なアカンサスである。アーキトレーヴは 2 つのモールディングによって 3 段構えとなっている。その上はフリーズ帯で、神殿の横と後ろ側に連続している。植物の花弁と丸くなったつるが連なる繊細なもので、そこには異なる彫刻工房の仕事が認められるという。西面のフリーズの中央あたりには、植物のつるの中に 5 羽の小さな鳥がいるのが見える。

メゾン・カレの内室 (cella/ セラまたはケラ) には、かつては神像が置かれていた。ただし通常の神儀・礼拝の儀式は外で行われたとも言われる。現在は神殿内部は特に見るべきものは少なく、注目すべき装飾などもない。20 世紀半ばまでは墓碑や碑文を展示する小博物館であったが、現在はニームの歴史を紹介する展示スペースとなっている。神殿内室には、17 世紀にアウグスティヌス修道会によって地下室が設けられたが、これは現在は非公開である。

ディアヌの神殿 (Temple de Diane) は、泉の庭園 (Jardin de la Fontaine) にある。ケルト時代の聖なる泉水 (ネマウススの泉) のある場所で、ローマ時代には皇帝崇拝の儀式を執り行う「Augusteum」が作られた。水源の近くからは、紀元前 25 年頃のものとしてされるアウグストゥス帝への献辞が刻まれた碑文が見つかっている。この水源から導かれた水は、「コ」の字形の列柱廊に囲まれたニンフの聖所 (nymphée) に導かれていた。この聖所の四隅には円柱が立ち、中央には皇帝崇拝の儀礼が行われる祭壇があった。ディアヌの神殿の場所は、この聖所から列柱廊をはさんですぐ西側にあたる。1 世紀末あるいは 2 世紀前半のハドリアヌス帝期のものとされるが、あるいはもっと早くアウグストゥス時代に建てられ、2 世紀になって改修されたとも考えられている。この神殿はニームにおいて最も興味深く、またもとの使用目的がはっきりしない謎めいた遺構と言われる。アウグストゥス帝とその一族を讃える儀礼の場であったともされるが、必ずしも純粋に神殿だったとも言えず、最近の研究では図書館であったのではないかという説が有力である。また「ディアヌ」という名称についても、なぜこの月の女神の名前が付けられたのかはよく分からない。

建物は、中央に大きな部屋 (cella) があり、その南北両側に 2 つの側廊 (couloir) が付く。

中央の部屋の南北の側壁には、ペディメント（三角形と半円形が交互になっている）の付いた奥行き浅い12のニッチ（壁龕）が並んでいた（現在残るのは北側の壁のみ）。このニッチの存在が、建物の図書館説の根拠となっている。つまりこのニッチは、彫像を置くには狭いが、巻物を置くにはちょうどいいというわけである。ニッチの間にはコリント式の円柱が並んでいたが、現在はそのうちの2本だけが残っている。この大きな部屋の天井は、横断アーチの並ぶ半円筒ヴォールトとなっ



30.3.1a Temple de Diane

ている。部屋の西端は、2つの柱によって3つの部分に分けられる。現在そこには格間天井の断片が置かれている。それには円形や菱形の幾何学的な枠の中に、花卉や植物の葉などが彫刻されている。北側の側廊には半円筒形のヴォールトが架かる（南側の側廊のものは大部分が失われている）。また奥（西側）から手前（東側）にかけて、ヴォールトが段々に高くなるように作られていて、階上部分にアクセスできるようになっていた。

ディアヌの神殿は、991年にニーム司教フロテール（Frotaire Ier）がベネディクト会修道院に与え、修道会はここをサン＝ソヴール教会（Saint-Sauveur de la Font/Saint-Sauveur de la Fontaine）とし、1562年まで使用した。16世紀からの宗教戦争の際に部分的に破壊された。1576年には火災を起こしたようで、その際には隣接して建っていた塔が失われている。その後は荒廃したままであったが、18世紀半ばになって、建築家ジャック・フィリップ・マレシャル（Jacques Philippe Mareschal）によって公園として整備された。18世紀半ばから19世紀初めにかけて活躍した画家のユベール・ロベール（Hubert Robert）は、このディアヌの神殿の絵を何枚も描いていることで知られる。ヘンリー・ジェームズ（Henry James）も1880年代にここを訪れて「心惹かれる」と書き残している。なおディアヌの神殿のすぐ西では、1994年からローマ時代のウィラ（Villa Roma）が発掘調査された。紀元1世紀から2世紀にかけての14の住居からなる邸宅で、その広さは6000平方メートルにも及ぶ。住居の壁に描かれた植物流文様や「グロテスク」な人物などのフレスコ画が見つかった。

古代以降のニームの歴史についても、大まかにたどっておきたい。2世紀終わり頃、公共浴場が部分的に破壊され、早くも危機の時代が始まった。3世紀にはユゼスから引かれていた水道の管理が滞るようになり、城壁内においても次第に放棄される街区が現れた。同時に民族移動の波が押し寄せるようになる。

ニームにキリスト教が伝わった正確な時期ははっきりしない。聖ボディル（saint Baudile/Baudilus）が殉教したのは3世紀終わり頃のことであった（287年とされるが、4世紀になってからであるとも言われる）。彼はオルレアンで（あるいはニームで）生まれ、布教活動を行い異教の儀式を拒んだことで捕らえられて、ニームの街のすぐ北（ニーム大聖堂の北およそ1キロの場所）で処刑された。伝説によれば、切り落とされた彼の頭は3度地面の上をはね、そこ

に泉が3つ湧いたという。この3つの泉 (les Trois Fontaines) には次第に巡礼が訪れるようになり、8世紀前半頃にはベネディクト会の修道士たちが定着した。1479年にその場所に聖ボディルのオラトワール (小礼拝堂) が作られた。大革命で破壊されたが、1872年に再建され、今に至っている。なお1913-1914年にF. Mazauricによって行われた発掘調査では、このオラトワールからさらに700メートルほど東のカルヴァ通りとエドモン・ロスタン通りの交わる場所で、古いサン=ボディル教会の遺構 (5世紀) が見つかっている。

ニームに本格的にキリスト教が普及したのは4世紀になってからのことである。その世紀の終わり頃 (394年あるいは396年) にはニームで教会会議が開かれ、21人の司教がこれに参加している。最初のニーム司教は聖フェリックス (saint Félix / 在位 374-407年。407年に殉教) とされるが、セダートゥス (Sedatus / 在位 506-510年) であるとする見方もある。

5世紀には、西ゴート族がニームとその周辺に定着し、6世紀初め頃にはニームは完全に西ゴートの支配下に入った。先にアレンヌのところで触れたように、673年には西ゴート王ワンバがニームを攻囲している。725年には今度はイスラームがニームを攻略するが、737年にカール・マルテルがこの街をイスラームから奪還している。ただしカール・マルテルは、結果的にイスラームよりもひどい被害をニームの街に (そしてプロヴァンスやラングドックにも) 与えたと言われる。9世紀終わり頃にはトゥールーズ伯の力がニームに及ぶようになる。その後はトランカヴェル家、アルビ副伯家などの支配を受けるが、1181年には完全にトゥールーズ伯の支配下に入った。その頃にはローマ時代の城壁と市域 (北側と西側) は放棄され、およそ30ヘクタールの、より狭い街区を取り囲む中世の城壁建設が進んだ。1096年、現在のカテドラルの献堂式がウルバヌス2世によって執り行われている (後述)。

13世紀初めのアルビジョワ十字軍の際には、ニームの街は初めはレーモン6世に好意的な立場を取るが、1226年にフランス国王ルイ8世が十字軍を主導すると、ニームは十字軍側に服従した。その結果この街は、ニーム=ボーケールを管轄する国王のセネシャル (代官) の支配下に入ることとなった。13世紀後半には都市ブルジョワジーの有力者からなるコンシュラ (都市参事会) が生まれている。1263年にはドミニコ会が女子修道院を創建、1270年にはカルメル会が定着した (ともに宗教戦争期に被害を受けたが、17世紀から18世紀に再建)。また14世紀にはアウグスティヌス修道会の女子修道院 (couvent) が、市壁の外側 (アレンヌのすぐ南側、今のEsplanadeあたり) に建てられている。百年戦争期の14世紀後半には、傭兵崩れの野盗 (Grandes compagnies / Routiers) の掠奪や課税に反対する農民反乱 (Révolte des Tuchins) などが頻発したこともあって、アウグストゥス門のところに国王の城 (château royal) が建造されている (ただし現存せず)。

16世紀半ばになるとニームはプロテスタント (ユグノー) の拠点となった。人口の半数以上がプロテスタントであったとされる。カトリックとプロテスタントの対立は、1567年9月29日に80-90人ものカトリックの司祭や修道士たちがプロテスタントによって殺されるという「聖ミカエル (サン=ミシェル) の祝日事件」 (ラ・ミシュラード / La Michelade) で激化した。その数ヶ月後には国王軍 (カトリック) がニームを占拠するが、1569年にニコラ・カルヴィエール (Nicolas Calvière) 率いるプロテスタントの部隊がニームを奪取した。さらに1621年に

はプロテスタントのリーダーであったロアンによるカトリックに対する戦い（*Guerres de Rohan*）が起り、カトリック勢力が司教と共にニームの街から追い出された。しかし 1685 年にルイ 14 世によってナントの勅令が廃止されると、今度はプロテスタントがニームから排除された。その後、1689 年からニーム司教となったエスプリ・フレシエ（*Esprit Fléchier*）はプロテスタントにも融和的で、双方の陣営から尊敬を得て、ニームは一時的に平穏な時期を迎える。しかし 1702 年から主にセヴェンヌでプロテスタントの反乱であるカミザール戦争が起り、1703 年 4 月 1 日にはその反乱を鎮圧しようとした国王軍によって、ニーム旧市街のすぐ北側のアゴ運河の水車小屋でプロテスタントが虐殺されるという事件が起こっている（*Massacre du moulin de l'Agau*）。犠牲者の多くは女、子供、老人だったとも言われる。新旧両派の争いは、1789 年のフランス革命の混乱の中でも続き、1790 年 6 月 13-16 日には「ニームの騒乱」（*Bagarre de Nîmes*）と呼ばれる事件において、王党派であるカトリックと共和派であるプロテスタントが衝突し、やはり多くの犠牲者が出た。

革命後の 1801 年 11 月 29 日に、ニーム司教区が廃止された。1801 年のナポレオンによる最初のコンコルダ（政教条約）の際に、ニーム、ユゼス、アレスの教区はアヴィニオン大司教区に統合された。しかし 1817 年のコンコルダの後、ニーム司教区の再設置が決まり、1822 年に新たな司教（*Claude Petit-Benoît de Chaffoy*）が着任している。1877 年からはニーム司教はユゼスとアレスの司教も兼ねるようになった。

第二次世界大戦に際してはニームは 1942 年からドイツ軍に占領されている。1944 年 4 月から 7 月にかけてアメリカ軍による空爆を受けた。街がドイツ軍から解放されたのは 1944 年 8 月 27 日のことであった。戦後は経済発展と人口増加が続き、ニーム都市圏は拡大したが、それに伴ってフランスの多くの他の都市と同じく、移民も増加し、郊外の治安の悪化といった問題なども発生している。現在は教育・文化政策にも力が入れられ、ニーム大学も組織的な整備が進み、そのいくつかの学部はかつてのヴォーバン要塞の中に移転している。また以前はアレンヌとアウグストゥス門の間の旧イエズス会コレージュの建物にあった考古学博物館が、老朽化が進んだこともあって、2018 年からアレンヌのすぐ南側に斬新なデザインで建設されたロマニテ博物館（*Musée de la Romanité*）として新たに開館している。主に古代ローマ時代を中心に、ケルト時代から中世までの幅広い時代の彫刻類や墓碑、考古学の成果などが展示されている。

ニーム大聖堂、正確にはノートル＝ダム＝エ＝サン＝カストール司教座聖堂は、ニーム旧市街の北東に位置している。この場所からは古代のさまざまな遺構が見つかっている。それらがどのような建築物であったのかは正確にはよく分からないが、カテドラルはアウグストゥスに捧げられたローマ時代の神殿の跡に建てられたと考えられている。カテドラルの前の「*Place aux Herbes*」には中世の墓地があった。先にも触れた最初の司教であるとされる聖フェリックスの時代に開かれた教会会議（394 年あるいは 396 年）の頃には、すでに聖母に捧げられた最初のカテドラルが建てられており、西を向いた半径 10 メートルの半円形の後陣など、その遺構は 1920 年に行われたエスペランデュー（*Espérandieu*）による発掘で見つかっている。ただしこ

の遺構は7世紀の司教である聖ルメセール (saint Remessaire) によって建てられたカロリング時代のものとする見方もある (M. Gouron)。このカロリング期のカテドラルについては多くのことは知られないが、幅およそ 21 メートルのアトリウムが付属していたようである。さらにサン=ティエンヌとサン=ジャンの2つの聖堂が隣接し、後者は洗礼堂も兼ねていたとされる。司教館や聖堂参事会員の住居なども付属しており、それら全体が周壁 (enceinte du Chapitre) で囲まれていた。

大聖堂は11世紀になって、今度は司教ピエール・エルマンゴー (Pierre Ermengaud、在位1080-1090年) によって建て替えられた。これがロマネスク期のカテドラルである。建設工事は1075年にひとまず終了し、1096年7月6日 (または7日)、教皇ウルバヌス2世によって献堂式が行われた。教皇は第1回十字軍を呼びかけたクレルモンからの帰りに、マグローヌからニームに入り、ニームで教会会議を主催したその翌日に献堂式を行ったのであった。この時点でカテドラルの工事自体がどこまで完成していたのかは、実はよく分かっていない。建物は未完成であったが、教皇ウルバヌスの来訪に合わせて、内陣と祭壇のみが聖別されたとの見方もある。

この献堂式には7人の枢機卿、10人の大司教、90人の司教と修道院長が参加したとされ、その中にはマルセイユのサン=ヴィクトール修道院長リシャール・ドゥ・ミヨーの姿も見られた。また俗界からは、11世紀後半頃にラングドックのこの地域に支配を広げていたトゥールーズ伯レーモン4世サン=ジル (Raymond de Saint-Gilles) が、カテドラル建設の強力な後援者として参加している。レーモン4世は、献堂式に際し、自ら十字架を掲げ、自分の指輪を祭壇に置いて教会に身を捧げた (教会と「結婚」した)。彼は同時に所領の寄進も行っており、そこにはラ・バスティード (la Bastide、ニームの南5キロ) やフォン=クヴェルト (Font-Couverte、ニームの北13キロ)、ベルガルド (Bellegarde [30.3.5]、ニームの南東13キロ) などが含まれていた。それ以来ニーム大聖堂参事会はトゥールーズ伯の紋章の赤い十字架を掲げ、レーモン4世のことをニーム教会の創建者と讃えるようになったと言われる。なおレーモン4世は1105年2月に、第1回十字軍遠征の際のトリポリ攻略の途上で死亡した。次代のトゥールーズ伯レーモン5世は、1194年12月にニームで没し、この大聖堂に葬られている。

11世紀のロマネスクのカテドラルは、東西の長さ54メートル、南北幅21メートルの長方形で、身廊は3ベイからなり (5ベイだったとの見方もある)、東を向いていた後陣は五角形であった。主身廊の両側に側廊が並び、その側廊の東端にはそれぞれペトロとパウロに捧げられた小後陣が付いていた。内陣は円柱に囲まれ (ただし1543年に取り壊



30.3.1a Cathédrale de Nîmes

された)、その床には鳥、動物、樹木などを表した見事な床モザイクがあったとされる。また内陣の下にはクリプトがあり、これは聖堂参事会員や司教の墓所であったとされる。外部は扶壁に支えられ、聖堂南側には「司教の塔」(Tour de l'Évêque、別名「宝物塔」Tour de Trésor)と呼ばれる鐘塔が立っていた。またやはり南側には、かつてのアトリウム(中庭)の場所にクロワトル(内庭回廊)があった。そこに並んでいた列柱の柱頭彫刻の一部(ヘロデ王とマギ、ラザロの復活、洗礼者ヨハネなど)は、サン=ジル、アルルのサン=トロフィーム、モンマジュールのものと類似しているとされる。

ロマネスク期の大聖堂は、13世紀になってアルビジョワ十字軍の際に被害を受けたが、最も深刻なダメージは、やはり16世紀以降の宗教戦争においてもたらされた。特に先にも触れた1567年9月の「聖ミカエルの祝日事件」(ラ・ミシュラード)の際には、プロテスタントの攻撃によって聖堂本体部分がほとんど破壊されてしまった。西ファサードと2つの塔がころうじて破壊を免れて残された。その後しばらくは廃墟のままであったが、17世紀に入って再建が始まり(1610年からとされる)、とりあえずの完成を見たにもかかわらず、1621年になって再び破壊された。今度は前回無事であった「司教の塔」も破壊されてしまった。二度目の再建工事は司教アンティム=ドゥニ・コオン(Anthyme-Denis Cohon/在位1634-1644年、1655-1670年)の主導によって1639年から始まり1646年まで続けられた。この工事によって身廊が以前のものより拡張され、側廊は礼拝室が連なる形に変えられた。その後1660年になって後陣が、さらに1669年にはその東に、建築家で彫刻家のポーレ(Paulet)によってバロック様式の豪華な「ロザリオの礼拝室」(Chapelle du Rosaire)が作られた。アンティム=ドゥニ・コオンは1670年にこの礼拝室に葬られている。

大革命の後、大聖堂はサン=カストールへと名前を変えた。聖カストール(カストリウス)は、5世紀前半のアプトの司教で、ニーム出身の聖人とされる(コブレンツの聖カストールとは別人)。1794年2月には理性の神殿となり、その後は最高存在の祭典が行われるなどした。現在はサン=カストールに加えて聖母の名前も復活している。

19世紀になると、すでにカトリックの大聖堂に戻っていたサン=カストールに再び改修・増築工事の手が加えられる。1873年、司教クロード=アンリ・プランティエ(Claude-Henri Plantier、在位1855-1875年)は、身廊北側にノートル=ダム・ドゥ・ルルド礼拝室(Chapelle Notre-Dame de Lourdes)を作り、死後はその礼拝室に葬られた。1878-1882年、エクス・アン・プロヴァンス出身の建築家アンリ・レヴォワル(Henri Révoil)によって大々的な改修工事が行われた。西ファサードから東側の現在の大聖堂内部は、身廊及びその両側に並ぶ礼拝室など、大部分がこの時に改修・整備されたものである。聖別されたのは1882年10月28日である。さらに1903-1904年にも工事が行われ、身廊とその南側にあるサン=サクルマン礼拝室(Chapelle du Saint-Sacrement)が改修された。最近では2015-2016年にナルテックスの改修が行われ、最初に建設された11世紀当時の大きさに広げられている。

現在の大聖堂内部はそのほとんどの部分が、19世紀後半のアンリ・レヴォワルの手によるネオ・ロマネスク様式のものである。単身廊形式で、身廊のヴォールトの高さは20メートルある。身廊の南北両側には礼拝室が並ぶ。身廊南側の、西から3番目の聖アンナ(sainte Anne)

の礼拝室には初期キリスト教時代の墓石が置かれている。礼拝室が並ぶ身廊の大アーケードの上は、小円柱に支えられた半円アーチが並ぶトリビューンとなっていて、さらにその上には、各ベイにステンドグラスがはめられた半円頭形の窓が開けられている。身廊部の天井は4分交差リブ・ヴォールトである。後陣は6つのリブによって分けられた五角形となっている。反対側の身廊西端の2階部分には17世紀の大オルガンが据えられている。内陣の地下にあるクリプトは非公開である。

西ファサード南側には、ロマネスク期以前にあったサン＝ジャン洗礼堂の跡に方形の鐘塔（Tour de l'Évêque/Tour du Trésor）が建てられていたが、すでに触れたように宗教戦争の際に破壊されてしまった。古い絵図に描かれたその姿は、細長い方形で、上の3階の各面には、2つのベイが一組となった窓が開けられていたようである。現存する西ファサード北側の鐘塔はやはり方形で、高さ約40メートルある。3階部分までは11世紀ロマネスク期のもので、マシナーリの付いた4階部分は14世紀、さらに一番上の鐘楼部分は15世紀である。この鐘塔の1階部分にある「殉教者たちの礼拝室」には、1567年9月の「聖ミカエルの祝日事件」（ラ・ミシュラード）の犠牲者の墓がある。

西ファサードには、この大聖堂において唯一ロマネスク期の部分が残っている。ただし宗教戦争によって大きな被害を受け、17世紀に修復されている（特に南側半分）。全体は二段構えとなっていて、装飾のほとんどない下段の中央に古典様式の扉口がある。こうした仕様は、例えば東ピレネーのエルヌ大聖堂、あるいはブルゴーニュ・トゥルニユのサン＝フィリベールのファサードとの類似が指摘されている。ニームでは、水平のコーニスを隔てて上段中央に丸窓が、そしてその左右にロマネスク様式の半円頭形の窓が開く。さらに彫刻の施されたフリーズが水平に延び、その上には三角形の切妻形のフリーズが付けられている。そのフリーズの向かってすぐ左側には方形の鐘塔に隣接する形で3つの開口ベイが並ぶ鐘楼壁が作られている。

もともとのロマネスク様式の小さな扉口は、1823年にアングレーム公爵夫人がここを訪れるのに備えて、その前年の1822年に取り壊され、三角形のペディメントが載る現在の大きな扉口に置き換えられた。その際、ファサードの上段と下段の間に水平に付けられていた古いフリーズ彫刻も壊されてしまったが、今でもペディメントの左右にかろうじてその一部が残されている。かなり摩耗して傷みも進んでおり、現在見ることができるのはおおよそその輪郭程度であるが、17世紀にリュルマン（Anne de Rulman）によって描かれた古いデッサンによると、ペディメントの向かって左側のは「ライオンを打ち倒すサムソン」で、右側のは「2匹のグリフォンによって空に引き上げられるアレクサンドロス」である。空を飛ぶアレクサンドロス大王という話は、中世においては『アレクサンドロス大王物語』という形で一般に広く読まれたとされるが、聖堂装飾にそれが現れるのは珍しい。フランスではニームの他にもワサック、シャロン＝シュル＝ソヌ、そしてトゥアール（ドゥー＝セーヴル県）などに見られるくらいである（南イタリアのオトラント大聖堂の床モザイクは有名である）。M.Gouronは、第1回十字軍とそれに従軍したトゥールーズ伯レーモン4世（11世紀のニーム大聖堂の創建者とされる）とニームのこの彫刻の関わりを指摘している。

新しい扉口のペディメントによって失われた中央部には、リュルマンのデッサンによれば、

「天使ガブリエルによるザカリアへの告知」(l'Annonce à Zacharie)があった。これは天使がザカリアに対して、彼の妻エリザベトに子供(後の洗礼者ヨハネ)が誕生することを告げ知らせるというもので、『ルカによる福音書』第1章で語られるエピソードである。さらにリュルマンのデッサンには、古い扉口の半円アーチの左右両側に牛の頭の彫刻が置かれているのが見える。同様の彫刻は、今もアレンヌの北側入口の上にあり、カテドラルのものは古代建築の影響によるものであろう。中世の聖堂の扉口に牛の彫刻を置く例は、南仏では例えばサン=レストイテュ(Saint-Restitut、ドローム県、12世紀)などにも見られるものである。

西ファサードの上段の壁面には、向かって左側に半円形の小アーチが連なるアーケード(ロンバルディア帯)の一部が残されている。それぞれのアーチは壁付き半円柱が受け止めている。その円柱の柱頭には大きな角の山羊や、ニワトリ、そして左右に広がる動物とも植物とも判別しがたい形の彫刻が見られる。ただし最も左側の山羊の頭やニワトリなどはロマネスク期のものではない。

西ファサード上辺を水平に延びるフリーズ装飾は、ニーム大聖堂においてロマネスク期の最も注目すべきものである。主に旧約聖書から題材が取られた18の彫刻パネルが連なっている。ただし向かって右側の12のパネルは宗教戦争期に破壊された後、17世紀(1646年)に再建されたものであるので、オリジナルのものは左側の6つのシーンのみである。旧約(いわゆるモーセ5書)をテーマとしているのは、新約から多くの題材を選んでいるボーケール、サン=ジル、アルルなどとは異なる点であろう。

フリーズの一番左端は「アダムとイヴ」(Adam et Ève)である。2人はヒザを曲げてかがみながら善悪の知識の木をはさんで立っている。その木にはヘビが巻きついている。ヘビはイヴの方に頭を向けている。イヴの顔と両腕は破損している。

2つ目は「墮罪」(la Faute)である。善悪の知識の木をはさんでアダムとイヴが対峙するという構図は、その左側の「アダムとイヴ」のパネルと同じであるが、「墮罪」におけるアダムは、イヴに勧められて善悪の知識の木の実を左手に持ってそれを口にしている。アダムの顔の下半分と彼が口にする木の実がかろうじて残されているが、イヴや善悪の知識の木などは完全に破損してしまっている。

3つ目のパネルは「神の叱責」(la Réprimande)である。バトンを持った神が左側に立ち、右側にはアダムとイヴが木の葉で体を隠しながら立っている。神は厳しい表情で二人を問いただし、アダムとイヴは少しうつむいているように見える。前の2つのフリーズとは異なり、イヴの顔がはっきりと残っている。神の顔にヒゲがないことも注目される。V. Lassalleによれば、初期キリスト教時代の石棺彫刻では、しばしばヒゲのない神やキリストが見出されるという。

4つ目のパネルは「楽園追放」(l'Expulsion du Paradis)である。左端に大きな剣を持ったセラフィム(熾天使)が楽園の入口をふさぐようにして立ち、その右側では罪を犯したアダムとイヴが、神(やはりヒゲがない)によって肩を押されながら楽園から追い立てられている。ひざをかがめた罪人二人は今も衣服を着ている。アダムの顔は破損しているが、イヴの顔はきれいに残っている。なお右端のセラフィムの彫刻を独立した1枚のパネルととらえると、ロマネスク期のフリーズは全部で7枚となる。



30.3.1a Cathédrale de Nîmes, Caïn et Abel.

5つ目のパネルは「カインとアベルの供犠（奉獻）」（le Sacrifice de Caïn et d'Abel）である。空から出ている神の大きな手に向けて、カイン（左）が麦の束を、アベル（右）は子羊を捧げており、神の手はアベルの供物である子羊の前足を受け止めている。カインは縮れ毛でヒゲを生やしているが、アベルにはヒゲがない。エミール・マールによれば、カインとアベルが彼らの捧げ物を薄い布に載せて差し出しているのは、オリエントの召使いが王に対するのと同じやり方であり、さらにまた雲の中から出ている神の手も、神の臨済を示す一種の象形文字であって、これらは古代オリエントの図像にさかのぼる荘重な芸術的刻印であるという。また M.Gouron によれば、ニームのカインとアベルはイタリアのモデナ大聖堂西ファサードのものと類似しているという。しかしモデナのものはカインとアベルの立ち位置がニームとは逆であり、捧げ物を薄い布に載せて差し出しているのはカインだけである。さらにモデナでは神の手は見られない。

6つ目のパネルは「アベルの殺害」（le Meurtre d'Abel）である。5つ目の「カインとアベルの供犠」とともに、人物描写や表情の豊かさ、全体的な均整と洗練さの点で、中世ロマネスク彫刻の中でも芸術的価値が高いと評価されるものである。カインはアベルの髪をつかんでその首に剣を突き刺している。カインの表情には神に受け入れられなかったことに対する不満と怒りが表れている。二人の姿勢とマントの曲線が躍動的である。

カインとアベルより右側に並ぶ彫刻パネルは、17世紀に再建されたものとなる。左側のロマネスク期の様式に従って制作されたものであるとされるが、その一方でロマネスクのものとは比べようもなく、調和もしていないとする見方もある。最初に来るのは「ノアの箱舟」（l'Arche de Noé）で、その後には以下のようなシーンが続く。「ノアの酔い」（l'Ivresse de Noé）、「ハベルの塔」（la Tour de Babel）、「ソドムの破壊」（la Destruction de Sodome）、「アブラハムとメルキゼデク」（Abraham et Melchisédech）、「アブラハムの供犠」（le Sacrifice d'Abraham）、「ファラオに会うヨセフ（ファラオの夢を解くヨセフ）（Joseph devant le Pharaon）」、「エジプト人がヘブライ人を虐待するのを目撃するモーゼ」（Moïse voyant un Égyptien frapper un Hébreu）、「燃える柴」（le Buisson Ardent）、「紅海を渡るモーゼ」（le Passage de la mer Rouge）。

「バラムとロバ」(l'Ânesse de Balaam)、「砂漠に宿営するヘブライ人」(le Campement des Hébreux dans le désert)、「石板を受け取るモーゼ」(Moïse recevant les Tables de la Loi)。1567年に西ファサードの右半分が破壊された後、1646年にその修復が終わるまでの間に80年近い歳月が経過していることもあって、これら17世紀のフリーズは、復元される以前にそこに連なっていたロマネスク期のフリーズをそのまま忠実に再現したものとは考えにくい。なお旧約聖書のテーマが並ぶこのフリーズの上に接する形で、やはり水平に連なるフリーズがある。装飾はアカンサス彫刻の連続であるが、向かって左半分のロマネスク期の部分の、ちょうど「アベルの殺害」のパネルのところまでは、アカンサスを背景にしてライオンの頭が等間隔に並べられている。

大聖堂西ファサード最上部は、三角形のペディメントとなっている。明らかに古代からのインスピレーションによるものであり、プロヴァンスなどではしばしば見かけるものである。ニームにおいてはメゾン・カレの直接の影響であろう。このペディメント前面はパルメット装飾が連続するフリーズとなっており、その下には巻き上がるアカンサス彫刻のモディオンが等間隔で並んでいる。ペディメントのフリーズの下面およびペディメントの下に並ぶモディオンの間の壁面には、さまざまな文様のロザス(rosace/円形花卉装飾)が並んでいる。このロザスについては、サン=ジルの西ファサード、あるいはモワサックとの類似性も指摘されているが、それ以上に、ペディメントに連なるパルメットのフリーズやロザスがモディオンの間に並ぶ全体的な様子が、トゥールーズのサン=セルナン・バジリカ聖堂にある有名な「ミエジュヴィル門」(Porte Miégeville、1090年頃)の上部のコーニスのもので非常によく似ている。ただしサン=セルナンの場合、フリーズの下に並ぶモディオンは、ニームのアカンサスとは異なり、動物やモンスター、異教の神を思わせる人物の顔などである。ニームのものの方が、より古代的なデザインであると言えよう。

サン=セルナンにおいて、とりあえず工事を終えた祭壇を含む内陣部分とトランセプトの聖別(献堂)式は、ニーム大聖堂と同じく1096年に教皇ウルバヌス2世によって執り行われている。やはり(と言うか、トゥールーズであるので当然のごとく)トゥールーズ伯レーモン4世サン=ジルもそこに同席していた。なおウルバヌス2世は、1095年8月から1096年8月までおよそ1年間にわたってフランスの中・南部各地を巡っているが、とりわけ有名なのは第1回十字軍を呼びかけたことで知られる1095年11月のクレルモン教会会議である。トゥールーズでの聖別式は翌年の1096年6月(または5月)、そしてニームでのそれは1096年7月である。教皇はその後1096年8月には、サン=ジル、ヴィルヌーヴ=レ=ザヴィニオン、アプト、カヴァイオンなどをへてローマに帰還し、同じ夏の終わり頃、トゥールーズ伯レーモン4世サン=ジルは第1回十字軍に出発したのであった。

大聖堂の前の広場(Place aux Herbes)から西に延びるマドレーヌ通り(rue de la Madeleine)1番地には「ロマネスクの家」(Maison romane)が残されている。12世紀後半のロマネスク彫刻が施された一般の住宅である。もともとは建物の2階部分に2つ一組となった半円頭形の窓が4組並び、それらの窓の間に彫刻のフリーズが付けられていたが、19世紀終わりに建物が改修された際に、その窓が縦長の方形の窓に置き換えられてしまった。向かって右側に、古い



30.3.1a Maison romane de Nîmes

窓のアーチの名残が認められる。彫刻装飾は1999-2000年にも修復されており、保存状態は良好である。ロマネスク末期のもので、動物や人間の頭を伴ったアカンサスの連なり、大きなモンスターやライオンなどの四足獣、足を広げて座る人物、植物文様のロザス（円形花卉装飾）や奇妙な（グロテスクな）顔などが彫刻されたメダイヨンなどである。また窓枠に付けられた小円柱の柱頭部分にも植物や牛、モンスターや不思議な人面などが見られる。このうち奇妙な顔の彫られたメダイヨンについては、エクス・アン・プロヴァンスのサン＝ソヴール大聖堂クロワトルのものと類似しているとの指摘もある。

**Bibliographie :**

ジェイムズ(1992) 202-205 頁; 杉(1992) 176-185 頁; ストラボン(1994) 319 頁; 瀬原(1993) 115 頁; 伝カリステネス(2020) 164-165 頁、455-477 頁; マール(1996) 55-56 頁; Aigon(1932) pp.16-17, pp.186-190; Aptel, et al.(1995) p.13-17, pp.20-48; *AR*, no.91, 2007, pp.8-9; Bernet(1984) p.151-155; Bromwich(1996) pp.93-108; Cabrol et Leclerc(1935) pp.1318-1374; *CAG*, 30/1(1996) pp.61-73, pp.112-115, pp.175-193, pp.213-215, pp.336-358, pp.459-470; Celié(2000) pp.513-515; Clément(2015) pp.68-73; Crozet(1937) pp.42-69; Darde(2000a) pp.515-517; Darde(2000b) pp.517-520; Darde(2005) pp.11-22, pp.31-103; Darde et Lassalle(1993) pp.49-103, pp.111-113; Dupont(1942) pp.29-33; *GC*, VI, 1739, pp.438-439; Germain(1838) pp.160-166; Germer-Durand(1868) pp.150-151; Goiffon(1881) pp.191-201; Gouron(1938) planche précédente de la page 35, pp.35-53; Lassalle(2000) pp.145-166; Ménard(1744) pp.56-59, pp.175-179; Morel(2008) p.56; Nougaret et Saint-Jean(1975) pp.38-39; Pelletier(1993) pp.160-161; Rivet(1988) pp.162-181; Schmidt(1995) p.39, pp.174-175, pp.291-292; Varène(1992) pp.19-178; *GV*; *RIP*.

Web-site : Nemausensis.com.

### 30.3.1b ニーム／サントウジェニー礼拝堂 (Chapelle Sainte-Eugénie, Nîmes)

大聖堂からマドレーヌ通りを西に約 60 メートルでサントウジェニー通り (rue Sainte-Eugénie) が分かれるので、それを南に折れてすぐ (15 メートル) である。サントウジェニー (あるいはサン=トウジェニー) すなわち聖エウゲニアは、3 世紀中頃にローマで殉教したとされる女性である。この礼拝堂は、10 世紀半ばにノートル=ダム司教座聖堂 (サン=カストール大聖堂) 参事会のカルチレールにその名が見いだされることから、ニームにある「現役」の聖堂の中では最も古いものである。17 世紀の宗教戦争期にはプロテスタントが占拠し、火薬庫として使用したりしている。1629 年のアレスの和約の後にはカトリックが取り戻し、大聖堂が再建されるまでの間、教区教会となった (1657-1746 年)。大革命の後には国有財産として売却され、その後はめまぐるしく所有者が変わり、19 世紀には一時、ビリヤード工場となったりもした (1792-1876 年)。1877 年には聖堂参事会員のシメオン・クーラン (Siméon Couran) が買い戻し、修復工事を行って再び聖堂としての役割を取り戻した。現在はニーム市の所有となっているが、今でも週末にはミサが行われる他、いくつかの信心会や修道会が礼拝のために利用している。

現在の西ファサードは 1880 年代にコンクリートによってネオ・ロマネスク様式で再建された。大きく分けて 2 段構えとなっていて、下の段は、それぞれロマネスク風の半円アーチ (多くはニッチ) や半円頭形の窓などが上下 2 列になって連なっている。上段には半円アーチで構成されるアーケードの上に 3 連アーチがあり、その中央にはキリストの像が立っている。ファサードの一番上は優美な鐘楼である。

聖堂内部は 3 ベイからなる古い身廊と、その東に続く新しい内陣から構成される。身廊部分西側は内陣に対してわずかに北側に傾いて (曲がって) いるように見える。一番西端には階上席が設けられている。10-11 世紀のこの身廊は、長さ約 21 メートル、幅約 8 メートルで、全体が白い漆喰できれいに上塗りされているが、半円筒形のトンネル・ヴォールトとそこに架かる半円形の横断アーチ、そして側壁には各ベイに大きな半円形の壁アーチ (ニッチ) が並び、その様子はロマネスク期の特徴をよく残すものとなっている。美しい交差リブ・ヴォールトが架かる内陣は 15 世紀に作られ、17 世紀半ばに再建されたものである。祭壇を取り囲む木製装飾はネオ・ゴシック様式で、祭壇の下には聖女ウジェニーの像が横たえられていてガラス越しに見ることができる。堂内には 4 つの墓石が床に埋め込まれているが、最も古いものは 12 世紀、新しいものは 17 世紀のものである。

Bibliographie :

Aigon (1932) pp.193-194; RIP.



30.3.1b Église Sainte-Eugénie

### 30.3.1c ニーム／サン＝セゼール教会 (Église Saint-Césaire, Nîmes)

サン＝セゼール地区 (かつてのサン＝セゼール＝レ＝ニーム村) は、現在はニームのコミューンに属し、その南西端に位置する。サン＝セゼール教会は、同名のサン＝セゼールの鉄道駅から駅前大通り (avenue de la Gare) を北に 250 メートル行き、教会通り (rue de l'Église) に入ってからさらに北へ 150 メートルである。自動車の場合は、ニームからモンペリエ方面へ向かう鉄道の北側に沿って続く県道 D540 を南西に進む。国道 N106 の高架 (D540 と N106 は直接は交わっていない) を過ぎて、700 メートルで北に曲がりラ・プレーヌ通り (rue de la Plaine) に入ると、およそ 200 メートルで教会通り (rue de l'Église／一方通行路) が分かれるので、やはりそれを北へ 150 メートルである。

最初の建設は 11 世紀にまでさかのぼり、ニームの司教座聖堂 (大聖堂) 参事会に属した。史料における初出は 1031 年である。その後の歴史については不明なことが多い。1668 年にニーム司教コオンの主導によって西ファサードや身廊部の改修工事が行われている。

西ファサードは南北方向に少し斜めになった道路に面しており、17 世紀古典様式の扉口が作られている。その装飾は二段構えとなっており、下段にはイオニア式のピラストルに左右をはさまれた方形の扉が開く。ピラストルが支えるのはブローケン・ペディメントで、上段にはやはりピラストルが立ち上がり、一番上は三角形のペディメントである。上段の中央は頭部にホタテ貝の彫刻装飾が付けられたニッチとなっており、聖母と思われる女性の彫像が置かれている。扉口の上には丸窓が開けられ、ファサードの上は切妻形である。この西ファサードの南側には 17 世紀の方形の鐘塔が付けられており、その塔頂部には円形の小ドームが載せられている。聖堂北側には身廊よりも高さの低い 14 世紀の建物が作られているが、その壁には装飾などは何もない。南側には住宅 (旧村役場) が隣接している。身廊部には南北共に外壁に扶壁が付けられている。

東側に回ると、ロマネスク期の後陣を見ることができる。形は半円形であるが高さがある。その中ほどよりも高い位置に太いコーニスが水平に付けられ、それを境にして上下二段構えとなっている。上下とも中石材がきれいに積まれているが、高さのある下段には装飾などは見られない。コーニスから上の部分には、半円頭形の窓が 3 つ開けられており、さらにその上には小アーチが連なるアーケード (一種のロンバルディア帯) が巡る。それらのアーチには、さまざまな形の単純な図形が彫刻された小モディオンが付けられている。そのうちのいくつかは聖アンドレ (アンデレ) を連想させる斜め十字形の文様である。

聖堂内部は 2 ベイからなる身廊に半円形の後陣 (11 世紀) が続き、東側のベイの南北両側にはそれぞれ側室 (14 世紀) が付けられている。身廊はかつては 3 ベイからな



30.3.1c Église Saint-Césaire

っていたが、17世紀に2ベイに切り詰められ、新しく西ファサードが作られた（鐘塔もその時のもの）。身廊の天井の半円筒形トンネル・ヴォールトには方形のピラストルに受け止められる形で半円形の横断アーチが架かる。東側の横断アーチと後陣の間の隔たりは1メートルにも満たないくらいの狭いものである。西側のベイは、2階建てとなっていて、オルガンが置かれている。2階部分の床は半円形という変わった形をしている。聖堂内部の壁面は薄黄色の漆喰できれいに上塗りされているが、後陣の上部にはロマネスク期の石組みがそのまま残されている。水平のコーニスの下には外部と同じようにアーチが連続するアーケードが巡り、そのアーチを受け止める小モディオンには、非常に図形化されたアカンサス風の彫刻—あるいは線刻によって図形化された羊や牛の頭のようにも見えなくはない—が施されている。コーニスの上は、6本の小円柱とそれが受け止める5つのアーチが連なるアーケードとなっている。小円柱に付けられた柱頭には、イオニア風のヴォリュートや不思議な人面（中央の2つ）が彫刻されている。ただし人面の柱頭はかなり摩耗している。

このアーケードには内部に向けて大きく隅切りされたロマネスク様式の半円頭形の窓が3つ開けられているが、中央の窓にはサン=セゼールすなわち聖カエサリウス（アルルのカエサリウス／470年頃-542年）のステンドグラスがはめられている。この聖人は、6世紀のガリアにおいてキリスト教の布教活動に多大なる貢献をなした人物とされる。レランス修道院出身でアルルの司教となった。彼が主宰した教会会議のうち、アグド（506年）とオランジュ（529年）のものが重要である。513年にはアルル郊外のアリスカンに女子修道院を創建している（524年にアルルの中に移転）。重要な著作としては、その説教集がよく知られている。

#### Bibliographie :

新カト、第1巻、1042-1043頁；Clément (1993) pp.285-286；Germain (1838) p.327；Germer-Durand (1868) p.198；*ML*, 2011.9.27；RIP.

### 30.3.2 ベルニス／サン=タンダレ教会 (Église Saint-André, Bernis)

ベルニス（またはベルニ）は、ニームから国道N113を西へおよそ12キロである。村役場のある旧市街はN113から南へ1キロのところであり、東西の直径が約250メートルの楕円形をしていて、小規模な中世都市の面影を残す形をしている。プラタナスの並ぶ環状道路は、かつての城壁（都市周壁）の跡に作られた。古代にはドミティア街道沿いにあったこともあり、ローマのマイルストーン（borne milliaire）がいくつか残っている。そのうちの1つはサン=タンダレ教会の中（後述）と、サン=タンダレの南30メートルの交差点にある三角形の小さな「島」に、そしてやはりサン=タンダレから北へおよそ300メートルの開けた芝生の公園の南端に、それぞれ残されている。P.A.Clémentによれば、ベルニスはサン=ジルとクラランサク（Clarensac、ニームの西）やマルゴワレス（Malgoirès、ニームの北）を結ぶ「塩の道」の重要な中継地でもあったという。

サン=タンダレ教会は、旧市街の環状道路の東端にある広場« place du Jeu de Ballon »からさらに東へ約150メートルほど行ったところに建っている。史料の初出は、1095年に教皇ウ

ルバヌス 2 世がサン=ジル修道院によるこの聖堂の所有を、クリュニー修道院長ディロンに対して確認した教書である。その後、教皇カリストゥス 2 世の教書 (1119 年) やインノケンティウス 3 世の教書 (1208 年) にもその名が現れる。宗教戦争の際に被害を受けた。とりわけ 1577 年に大きく破壊されたとされる。再建工事はいったん 1680 年に終わるが、1703 年には火災に遭っている。再び修復工事が進められ、ヴォールトや後陣部分が再建された。大革命の後は取り壊しは免れるが、理性の神殿、穀物倉庫、役場施設などとして使用された。1795 年からは教区教会に復帰している。

16 世紀以降、何度も破壊と再建が繰り返されているので、建物自体は時代の異なる部分が入り交じっている。11 世紀ロマネスクの部分は、西ファサードと身廊の南北の側壁である。この身廊側壁については、P.A.Clément は西側の 3 つのベイが古いものであるとしているが、Nougaret et Saint-Jean によれば、古いのは西側の 2 つのベイである。西ファサードは屋根が切妻形で、上部中央に大きな丸窓 (18 世紀) が開けられている。南側には、もとは 15 世紀に建てられその後 19 世紀に改修された方形の鐘楼が立つ。一番上にはクロケット装飾の付いた小尖塔が四隅に立ち、中央にはやはりクロケットの並ぶ大きな尖塔が立っている。

西ファサードの扉口はロマネスク期のものである。左右両端に太い扶壁が付く四角い出張りの中に、四重の半円形アーキヴォルトとその下に半円形のタンパン、そしてアーキヴォルトを左右で受け止める小円柱と側柱の組み合わせから構成される。

アーキヴォルトは円筒形のヴシュールと方形のヴシュールが交互に並んでいる。タンパンは少なくとも今は無装飾である。4 つのヴシュールは、基壇の上に立つ 4 本の小円柱が受け止める。この小円柱は、方形の側柱とペアーになっており、彫刻の施された柱頭が付くが、この柱頭は横長であって、ペアーとなった側柱の組石と一体 (一枚石) である。この横長の柱頭の上にはさらに大きな冠板が載せられている。

向かって左側の柱頭彫刻は、外側のものは向かい合った 2 羽のワシ (摩耗が進んでいる) と、その横に円環に 4 つの角の付く 1 本紐 (1 条線) の組紐文様や、円環を伴わない 4 つ角形組紐がある。これらの組紐は、円環を伴う場合とそうでない場合も共に、十字架を意識した十字形組紐 (croix d'entrelacs) であると言える。

内側は 2 頭の向かい合ったライオンらしき動物 (これもまた破損が進んでいる) と、その横に 6 枚の花びらを持つロザス (円形花紋) がある。この 2 つの柱頭の上の冠板部分には、それぞれ角を持つ 3 本紐 (3 条線) ないし 2 本紐 (2 条線) による組紐文様とパルメットが彫刻されている。外側の冠板の角には、パルメットのツルを口から吐き出すモンスターの顔らしきもの名残が見て取れる。



一方、扉口の向かって右側の柱頭彫刻は、

### 30.3.2 Église Saint-André de Bernis

外側は長い尾をくねらせるドラゴン(頭の部分は削げ落ちている)と、その横には円形で4つの角のある2本紐の組紐文様があり、内側の柱頭は左右に大きく尾を広げる人魚(セイレーン。やはり頭は削げ落ちている)と、その横には3本紐による4つ角形の組紐文様がある。扉口左側と同じように、柱頭の上の大きな冠板には外側のものにパルメット、内側のものには尖った角を持つ3本紐からなる組紐文様が彫刻されている。また外側の冠板の角にはモンスターの顔らしきものの彫刻の跡が残されている。この扉口を飾る柱



30.3.2 Église Saint-André de Bernis

頭彫刻は、11世紀終わりあるいは12世紀前半のものと考えられるが、とりわけここに見られる組紐文様やパルメット彫刻は、かつてサン=ジール近くのエスタジェル(Estajel)にあった12世紀のサント=セシル聖堂扉口の装飾彫刻(現在はパリのルーヴル美術館に展示されている)との類似性がしばしば指摘される。どちらも共に、今日にまで伝えられるカロリング様式の記憶が強く感じられるものである。

身廊の外壁には、南北共に等間隔に扶壁が並ぶ。半円頭形の窓が、北側では2ヶ所、南側では3ヶ所に開けられているが、そのうちロマネスク様式のもの、身廊南側の左右両端に開く窓で、西側のもは方形の鐘塔に半分が遮られている。東側の窓は隅切りされた半円頭形で、ロマネスク期の様子をよく伝えるものである。この身廊南壁の一番東端(内陣の南)にある側室の上には、屋根と壁面の境に延びるかつての軒樋とそれを支える無装飾のモディオンが5つ並んでいるのが見える。軒樋の東端には排水のためのいわゆる「ガーグイユ」が残されている。身廊部のヴォールトは18世紀に修復されているが、この軒樋とモディオンはそれよりも古いものなのではないかと思われる。内陣部の北側にも大きな祭室が増築されており、その上には丸くて新しい小ドームが載せられている。

後陣は17世紀から18世紀にかけて再建されたものである。3つの面を持つ台形状で、それらの面の角には、頭部が斜めに切られた太い扶壁がつけられている。南北の2ヶ所に半円頭形の窓が開けられているが、いずれも近代のものである。それらはかつてはゴシック様式の尖頭形の窓であったのだが、その後現在の小さめの窓に作りかえられた(ゴシックの窓枠が残されている)。

聖堂内部は3ベイからなる身廊に内陣と後陣が続く。内陣の南北両側には方形の側室が増築されている。半円アーチで接続する北側のそれは祭室で、小さな方形の扉で接続する南側の部屋は聖具室である。身廊の3つのベイの側壁は古い時代に属するもので、石組みがそのまま残されているが、水平のコーニスから上の半円筒形のトンネル・ヴォールトおよび3面からなる後陣の壁とその上の半ドーム(3つのリブが架かる)は、すべて漆喰できれいに上塗りされている。側壁の各ベイには二重になった半円形の壁アーチが並ぶ。身廊の天井に架かる横断アー

チを受け止める 4 本の円柱のうち、北東の柱はかつてドミティア街道に立っていた古代ローマ時代のマイルストーンを再利用してそこに組み込んだものである。上部に残された碑文によれば、ローマ帝国第 4 代皇帝クラウディウスの時代のものであることが知れる。なお身廊の北側の 2 本の円柱は、このクラウディウスのマイルストーンも含めて側壁の中程までの長さで、その上は方形のピラストルとなって横断アーチを受けるが、南側の円柱はヴォールトの起拱点である水平のコーニスまで達する長いものである。また壁アーチの高さも南北の側壁で異なり、形も北側のものがわずかに扁平アーチとなっている。そういう意味で、身廊部の南北の仕様は非対称的である。これは 17-18 世紀に行われた再建工事によるものであろう。身廊西端のベイにはトリビューン（19 世紀）が作られている。飾り気のない 3 面からなる後陣には、南北の面に半円頭形の窓が開き、それぞれスタンドグラスがはめられている。

**Bibliographie :**

Buholzer (1962) p.128; *CAG*, 30/2 (1999) pp.241-242, Clément (1993) pp.192-193; Nougaret et Saint-Jean (1975) p.26.

Web-site : Amis de Bernis; Base Mérimée (Bernis) .

### 30.3.3a ボーケール／サン＝ルイ城塞礼拝堂

#### (Chapelle Saint-Louis du château de Beaucaire)

ボーケールは、ニームから東へ約 24 キロにあり、同時に北のアヴィニオンと南のアルルのおよそ中間に位置する。アヴィニオンからはローヌ川沿いに 21 キロ、アルルからはやはりローヌ川に沿って 18 キロである。またローヌ川を挟んでちょうど対岸にあるのはブーシュ・デュ・ローヌ県のタラスコンで、共にラングドックとプロヴァンスの境をなし、古くから交通の要所でもあった。

ボーケールの最も古い集落は紀元前 7 世紀頃までさかのぼる。紀元前 1 世紀以降の古代ローマ時代にはウゲルヌム (Ugernum) と呼ばれ、イタリアとイベリア半島を結ぶ古代ドミティア街道の重要な中継都市であり、アルルを防衛する役割も担っていた。その最盛期は紀元 1-2 世紀とされる。ニーム（そしてイベリア）方面へ向かう場合、ドミティア街道はボーケールから出ると (Chemain des Romaines)、現在のジョンキエール＝サン＝ヴァンサンを少し南をほぼまっすぐに西へ延び、ルデサン (Redessan) で現在の県道 D999 となる。ボーケールの旧市街の西端、すなわち県道 D999 と D15 が交わるころから直線距離にして約 3 キロのところ（ただし途中で大きな採石場があり、そこは通行不可）の旧ドミティア街道沿いに、マイルストーンが 4 つ並んで保存されている (colonnes de César)。そのうちの 3 つは紀元前 1 世紀後半のアウグストゥスの時代のもので、紀元 1 世紀前半のティベリウス帝時代のもので、そして紀元 2 世紀前半のアントニヌス・ピウス帝時代のものでとされる。4 つ目は土台部分が残るだけで、時代などは不明である。

民族移動期の混乱の中、455 年のヴァンダル族によるローマ劫掠のあと、ガリアのクレルモ

ン出身でローマ軍の高官でもあったアヴィトゥス (Avitus) が、西ゴート王テオドリク 2 世に推されて西ローマ皇帝位に就いたのは、ここウゲルヌムであったとも言われる。533 年にはアウストラシア王テウデリク 1 世の軍がウゲルヌムの城塞を占領し、585-587 年には西ゴート族がこの街を手に入れている。また 8 世紀にはイスラーム勢力の攻撃も受けている。11 世紀にはウゲルヌムは美しい石 (または美しい岩山) を意味するボーケールという名で呼ばれるようになり、ローマ時代のカストルムには現在までその遺構が残る中世の城塞が築かれた。

1125 年、トゥールーズ伯アルフォンス・ジュールダン (Alphonse Jourdain / 在位 1109-1148 年) が南フランスにおいて対立していたバルセロナ伯レーモン・ベランジェ 3 世 (Raymond-Bérenger / 在位 1086-1131 年) と領土分割についての協約を結び、その結果ボーケールのカストルムを手に入れることとなり、本格的な城塞の建設が進められた。1197 年にはトゥールーズ伯レーモン 7 世がこの城で生まれている。

1209 年、カタリ派討伐のためのアルビジョワ十字軍を率いたシモン・ドゥ・モンフォールがこの城を奪い守備隊を置くが、1216 年に若きレーモン 7 世が攻囲戦を行って奪い返している (この攻囲戦は『十字軍の叙事詩』でも知られる)。しかし 1229 年にレーモン 7 世と国王ルイ 9 世 (聖王ルイ) との間でバリ条約 (モーの協約) が結ばれてアルビジョワ十字軍が終わると、ラングドックは王領に編入され、ボーケールの城はセネシャル (国王代官) の居城となった。ルイ 9 世は、十字軍に出発あるいは帰還する際、この城に滞在している (1248 年、1254 年、1270 年)。

中世の間、ボーケールの対岸のタラスコンは、法的には神聖ローマ帝国領であった。ボーケールの城は必然的にタラスコンを監視する役割も担っていた。この 2 つの街はしばしば対立し、1384 年には、プロヴァンス女伯でナポリ女王のジャンヌ 1 世 (ジョアンナ 1 世) の死を受けて起こった同伯位をめぐるシャルル・ドゥ・デュラ (カルロ 3 世 / カルロ・ディ・ドゥラッツォ) とアンジュー伯・ナポリ王ルイ 1 世の争いの中で、前者に味方したタラスコンがボーケールを攻囲するなどしている。

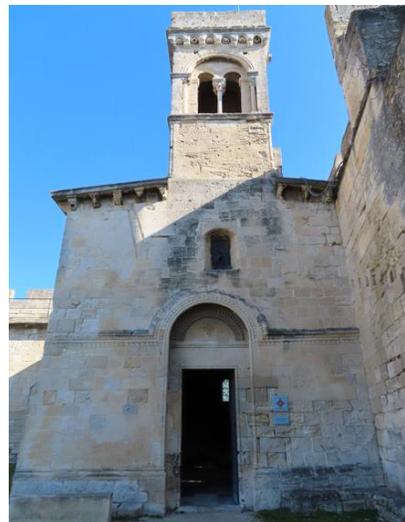
ボーケールの街と城は、15 世紀には百年戦争によって被害を受け、さらに 16 世紀の宗教戦争期になるとカトリックとプロテスタント双方による争奪が繰り返された。1562 年にプロテスタント (ユグノー) がこの街を占拠したが、翌年にはカトリック側がラングドック総督であったアンリ・ドゥ・モンモランシー・ダンヴィル (1 世) の支援を得て奪い返している。彼の息子でやはりラングドック総督アンリ・ドゥ・モンモランシー (2 世) はボーケールの城を拠点の 1 つとして、プロテスタント勢力と戦った。1632 年、彼はルイ 13 世の弟ガストン・ドルレアンと結んで、ラングドックでルイ 13 世とリシュリユーに対する反乱を引き起こすが、ほどなく鎮圧されてトゥールーズで処刑される。城はリシュリユーの命によってかなりの部分が取り壊された。大革命の後は国有財産として売却されるが、1830 年にボーケールのコミューンの所有となり、修復作業が行われるなどして今日に至っている。

現在、城の入口はそれが建つ岩山の南西角のレーモン 7 世広場から石段を登ったところにある。中に入ると、左側には銃眼とマシナーリが並ぶ城壁 (13-14 世紀) が南から北へと続いている。それを左手に見ながら右 (東) へ進んでゆくと、ボーケールの街を見渡すことのできる

テラスも兼ねた広いスペース (Basse-cour) となる。そのスペースの北側には、古代ローマ時代のカストルムの城壁の遺構と、12世紀の主塔 (ドンジョン) であったともされる大きな円塔の土台部分が残っている。さらに進むと落とし格子を備えた方形の門 (Tour-porte) があり、そこから西が城の内域 (Baile haute) となる。この方形の門を入ってすぐのところに城塞礼拝堂があり、さらに北側にメルロンが並べられた城壁が三角形の塔 (Tour polygonale) まで続く。現在はこの塔が主塔 (ドンジョン) とされ、ボーケールの城のシンボルともなっている。13世紀の建設で、高さは 24 メートルある。一番上には銃眼が付けられたメルロンとマシクリが巡る。ただしこの部分は近年の修復工事の際に復元されたものである。内部は 3 階建てで、2 階の部屋には交差リブ・ヴォールトが架けられている。1 階の部屋の壁にはフレスコ画が描かれていたが、現在はほとんど見えなくなっている。なお平面プランが三角形の主塔というのは、フランスでもきわめて珍しいものである。この三角形の主塔からさらに城壁に沿って西に行くと、大きな円塔が残されているが、主塔の南側に広がる内域のスペースにかつて建てられていたと思われる居館その他の城塞の建築物は、礼拝堂を除いて 17 世紀にすべて取り壊されている。わずかに井戸や地下室、城の北壁の外に出るための石段などの遺構が残されているだけである。

サン=ルイ城塞礼拝堂 (Chapelle castrale) は、城の内域の東端にある方形の門の西側に接する形で建てられている。岩盤および城壁のプランに合わせて建設されたために、全体が北東を向き、平面プランもわずかに平行四辺形となっている。建物はロマネスク様式であるが、建設は 12 世紀後半または 13 世紀前半～中頃で、19 世紀 (1844-1845 年) になって大々的に修復されている。ルイ 9 世 (聖王ルイ / 在位 1226-1270 年) が列聖されたのは 1297 年のことなので、この礼拝堂はもともとは別のパトロン、例えば聖母マリアあるいはサン=ミシェルなどに捧げられていたのではないかと思われる。外側の南北長が約 12 メートル、東西幅は 8 メートルという小さな礼拝堂で、時代を通じて城塞の守備兵たちのためのものであったとされている。

扉口はファサードの中心から少し左にずれて開けられている。縦長の扉の上に架かる半円形のアーキヴォルトには、小さな三角形のギザギザ文様が連続する。かつては小穴が付けられた大葉形文様がその外側のアーチを装飾していたが、現在はそのアーキヴォルトの両端およびそこから左右両側に水平に延びるフリーズ部分に、三角形の連続文様とともに残るのみである。このアーキヴォルトの内側 (下側) には、パルメット様の連続装飾が彫刻されている。タンパンにはマルタ十字が彫刻されている。このタンパンの内側には、さらに歯車形文様や卵形文様、そして細長い植物の実のようなものが連なる半円形ヴェジュールが彫刻されている。ファサード上部



30.3.3a Chapelle Saint-Louis

には小さな窓が開けられ、斜めになった屋根の上に方形の鐘塔が立つ。斜めの屋根に沿って並ぶ8つのモディオンは、人間や悪魔の顔、鳥、牛の頭、図形的なアカンサスなどであるが、これらは19世紀の修復の際に付けられたものである。

鐘塔は方形で高さが7.5メートルある。モールディングによって区切られた三段構えになっており、一番下の土台部分の壁面は無装飾であるが、角には細長い小円柱が付けられ、その柱頭は渦を巻く植物装飾となっている。鐘塔の中段は、各面において中央に2本の小円柱が立つ2つ一組の小アーチと、さらにそれを包み込む形で大きなアーチが架かり、この大きなアーチもまた左右で小円柱が受け止める。これらのアーチは三重のモールディングから構成されている。また冠板を介してアーチを受け止めるこれらの小円柱の柱頭には、小アーチを受け止める2本一組の小円柱のそれも含めて、それぞれ植物装飾が彫刻されている。ただし、東側中央の小円柱の柱頭には、二又の人魚が4つ彫刻されている。かなり傷んでいるが、それぞれ両手で左右に広がる尾ひれをつかんでいる様子が見て取れる。また西側の中央の小円柱の柱頭には、これもまたかなり傷んでいるが、サン=ミシェル(大天使ミカエル)と思われる彫刻が、さらにその西面の大きなアーチを受ける向かって右側の柱頭彫刻にはアクロバティックな姿勢の人物が見られる。

鐘塔の中段上部は、4面すべてに、わずかに尖頭形となった小アーチが連なるアーケードが巡る。この小アーチは各面に6つずつ付けられており、アーチの中にはさまざまな形のロザス(円形花卉装飾)や、いわゆる草のツルを吐く「グリーンマン」その他の不思議な人面や牛の頭などが彫刻されている。またこの小アーチを受け止めるモディオンにも、やはりさまざまな彫刻が施されている。すなわちモンスターや奇妙な人面、鳥、図形的な植物文様、幾何学紋様などである。このアーケードとモディオンについては、一見して19世紀(1844-1845年)の修復の際に付け加えられたか、あるいは置き換えられた、比較的新しいものであるかのような印象を受ける。M. Contestin と A. Michelozzi は、その修復以前に描かれた鐘塔のデッサンと現状の様子に大きな違いが見られないことから、19世紀に置き換えられた3本の小円柱を別として、この鐘塔のアーケードとモディオンは中世のものであるとしている。しかしながら、全体的な彫刻の保存状態、アーケードの尖頭形の小アーチ、彫刻のテーマなどから、確かにそれらは「中世」のものであるかも知れないが、少なくともロマネスク期のもではなく、ゴシック期以降のものであると思われる。この礼拝堂自体13世紀に入って建設されたものであるという見方が多いので、そうすると様式的にはロマネスク後期あるいはすでにゴシック期に入っているが、鐘塔上部の装飾に関しては、ロマネスク期の雰囲気の色濃く残す礼拝堂本体よりもさらに後の時代のものでないかと思われる。また一部分は



30.3.3a Chapelle Saint-Louis

やはり 19 世紀の修復の際に置き換えられた可能性も否定できない。なお鐘塔の最上部（アーケードとコーニスの上）は、量塊感のある無装飾のアティックとなっている。

礼拝堂の南側および東側の外壁は、城を取り囲む城壁（メルロンが並ぶ）の一部をなしていて、東側に 1 ヶ所、南側に 2 ヶ所、それぞれ外側に向けて隅切りされた半円頭形の窓が開けられている。

礼拝堂内部は、2 ベイからなる身廊だけから構成されるシンプルな形で、東西長は約 9 メートル、南北幅は 5 メートルほどである。東側に 1 ヶ所、南側に 2 ヶ所、外側と共に内側にも隅切りされたロマネスク様式の窓が開けられている。東側のベイの北側には半円頭形のニッチが付けられている。この東側のベイは西側のそれよりもわずかに南北幅が狭くなっている（左右でそれぞれ約 20 センチずつ）。東側のベイは方形であり、東端の壁も平面形である。いわゆる内陣はないが、このベイには祭壇が置かれていたであろうから、あるいはこれを内陣と見することもできよう。天井は水平のコーニスの上に半円筒形のトンネル・ヴォールトが架けられている。2 つのベイの間に横断アーチはない。東端の壁面に付けられたアーチは左右両端のコーニスのところに簡素なコンソール（渦巻き形持ち送り）が付けられている。堂内にはこれ以外に装飾の類いは見られない。「北からの十字軍に対する勝利者トゥールーズ伯レーモン 7 世、この城で生まれる」というパネルが堂内に飾られている。ここで言う「勝利者」とは、1216 年のボーケール攻囲戦におけるそれを指しているであろう。

最後に有名なボーケールの大市（別名マドレーヌの大市）についても触れておこう。この大市は、アルビジョワ十字軍による戦乱のさなかの 1217 年、トゥールーズ伯レーモン 6 世が創設したものである。1463 年に国王ルイ 11 世が、この大市を免税自由市として以来、その規模は拡大の一途をたどった。市の場所はローヌ川沿いの「プレ (Pré)」と呼ばれる河岸から次第に街の中にまで拡大し、また開催期間も 7 月の 1 週間から 1 ヶ月間に延長されるようになった。ほどなくボーケールの大市はフランス最大のものとなり、国内のみならず、ヨーロッパのさまざまな地域、そして中近東やアフリカなどからも商人たちが集まった。その数は多い時には 30 万にもものぼったとされる。また売り買いされた商品も、食料品から衣料品、生活用品そして武具まで、ありとあらゆるものが見られた。大市は 18 世紀に最盛期を迎え、フランス革命の混乱期にも衰えることはなかったが、19 世紀半ばに鉄道が開通すると次第に衰退し、ついには開かれなくなってしまった。同じ頃ボーケールからサン＝ジルやエグ＝モルトを経てセットまでつながる運河（その先はミディ運河と接続する）が開通し、ボーケールの旧市街の南側には東西 600 メートルほどのボーケール港（船泊）も整備された。現在はヨットやクルーザーなどレジャー用の船が停泊している。

#### Bibliographie :

太田 (1989) 122 頁; Boudin (1887) pp.353-388; Bromwich (1996) pp.58-59; *CAG 30/2*, pp.201-202, pp.221-222; Clément (2015) pp.74-77; Contestin (1973) ; pp.129-136; Contestin et Michelozzi (2010) pp.129-151; Germer-Durand (1868) pp.22-23; Jacquet et Cestin (1977) pp.4-10; Lassalle (1978) pp.143-164; Lombard et al. (1974) pp.33-44, pp.82-84; Moreau (1997) pp.41-43; Pérouse de Montclos, dir. (1996) pp.144-150; RIP

### 30.3.3b ボーケール／ノートル＝ダム＝デ＝ポミエ・コレジアル教会

#### (Collégiale Notre-Dame des Pommiers, Beaucaire)

ボーケールの旧市街は、城のある岩山の南側に広がり、ノートル＝ダム＝デ＝ポミエ・コレジアル教会は、その旧市街のほぼ中央に位置する。現在のコレジアルは18世紀前半の1734年から1744年にかけて、手狭となったロマネスクの古い聖堂を取り壊して古典様式（またはイエズス会様式とも言う）で新たに再建されたものである。工事を主導したのはアヴィニヨンの建築家ジャン＝バティスト・フランク（Jean-Baptiste Franque）である。大革命の後は理性の神殿として使用されたりもしたが、1804年にカトリック教会に復帰した。現在はボーケールの教区教会である。

「ポミエ」という名前は、ローマ時代の城壁の外にあった宗教儀式の場を意味するラテン語の«*pomoerium*»に由来するとされる。コレジアルを建設する際に取り壊されたロマネスク時代の古いノートル＝ダム＝デ＝ポミエ教会は、1096年にトゥールーズ伯レーモン4世（レーモン・ドゥ・サン＝ジル）が、第1回十字軍に出発するにあたって、オーヴェルニュのラ・シェーズ＝デュ修道院（La Chaise-Dieu、現オート＝ロワール県）に譲ったもので、ラ・シェーズ＝デュのベネディクト派修道士たちは、ここに小修道院（プリウレ）を作った。レーモン4世はノートル＝ダムとともに、ボーケールにあるサント＝バスク（サント＝パック）とサン＝ナゼールの2つの教会も譲っているが、ノートル＝ダムは教区教会となり、サン＝ナゼールはほどなくサント＝カトリーヌ（Sainte-Catherine）と呼ばれるようになり、小修道院の修道士たちが使用した。サント＝バスクの方はその後消滅して、現存しない。

現在のコレジアル教会は南北方向を向いており、その南側ファサードは曲面構造で、イオニア式とコリント式の付け柱が二段に重なり、一番上には丸い時計がはめられた三角形のペディメントとなっている。中央の扉口の上には聖母被昇天の浅浮き彫り彫刻がある。このコレジアル南側ファサードの前の広場は、ボーケールの歴史家の名を冠してオリビエ・ロンバル広場と言うが、1734年に取り壊された11世紀後半建設の旧ノートル＝ダム＝デ＝ポミエ教会は、その身廊部と後陣が、ほぼこの広場に位置していた。半円形の後陣は東を向き、身廊は3ベイからなり、東端のベイ（内陣）の上にはクーポールが載っていた。またその内陣の南側には約30メートルの鐘塔が立っていた。さらにこの聖堂の北には、小修道院の建物と付属サント＝カトリーヌ教会があった。それは現在のコレジアルの身廊の南から2番目と3番目のベイにあたる場所である。このサント＝カトリーヌも半円形の後陣は東を向いており、その西側には12世紀のクロワトル（回廊）が続いていた。このクロワトルは、現在でもコレジアルの南ファサードのすぐ西（向かって左）側にその遺構（北と西の壁面の一部のみ）が残されている。クロワトルのすぐ南（ノートル＝ダムとサント＝カトリーヌの間）には、1566年から1935年まで黒色苦行会（*pénitents noirs*）の礼拝堂が建っていたが、取り壊されて現在は学校の敷地となっている。

このような訳で、ノートル＝ダムとサント＝カトリーヌという11世紀後半に建てられたロマネスクの聖堂の建物自体は残されていないが、現在のコレジアル教会の東側の壁面（東側トラ



30.3.3b La Cène, frise romane de Notre-Dame des Pommiers, Beaucaire

ンセプトの外壁)の地上から15メートルという高い場所に、その古い聖堂から移されたフリーズ(帯状の彫刻)が埋め込まれている。シャルリエ通り(rue Charlier)にヴォルテール通り(rue Voltaire)が突き当たる場所である。このフリーズが制作されたのは11世紀後半から13世紀前半(おそらくは12世紀後半頃)とされる。もともとあった場所についても、取り壊されたノートル=ダムかサント=カトリヌの、西ファサードの扉口あるいは内陣障壁と推測されるが、正確なことはよく分からない。

このフリーズは縦90センチ、全長13.7メートルで、「最後の晩餐」を中心に、福音書に書かれたイエスの受難を表す11の場面(ブロックの数は20)から構成されている。向かって一番左側から以下のように並んでいる。

- ・「ペトロの否認を予言するイエス」：イエスが右側にいて、左側には3人の使徒が並ぶ。ペトロの足下にいるのはこの予言に出てくる鶏であろう(ただしその頭は失われている)。
- ・「弟子(ペトロ)の足を洗うイエス」：左側に立つ小円柱の上にはイエスが着ていた上着が掛けられている。またイエスは手ぬぐいを腰に巻いている。イエスはかがんでペトロの足を洗い、ペトロは椅子に座って自分の片足をたらいの上に差し出している。
- ・「最後の晩餐」(La Cène)：4枚のパネルからなり長さは3.6メートルあって、このフリーズの中ほどの大きな部分を占めている。長いテーブルには中央にひときわ大きなイエスが座り、その両側に12人の弟子たちが並ぶ。イエスの頭には前の2つの場面と同じく、十字の付いた光輪が輝いている。イエスの胸には、向かって左側にいる最も愛する弟子(ヨハネと言われる)が寄りかかり、イエスはその弟子の上から、さらに左側に座るユダの口にパン切れを差し出している。長いテーブルにはクロスがかけられ、一定間隔で壺が並ぶ。テーブルの上には食べ物や食器類が置かれ、弟子たちがそれらを持ったりしている。向かって左から4人目の弟子の頭は失われている。またイエスの上にだけパルメット彫刻があるが、これは弟子たちよりも一段高い位置にある彼の頭と光輪を残すためであろう。
- ・「マルコスの耳を切り取るペトロ」：幅の狭いブロックである。向かって左側には小さな若者を取り押さえる兵士らしき男、そして右側には剣を抜いてマルコスの右耳を切り落とすペトロ

がいる。マルコスの顔と左半身は失われている。取り押さえられている若者はイエスと思われるが、その頭に光輪は付けられていない。

・「大祭司から金を受け取るユダ」：大祭司（カイアフア）は向かって左側に座り、ユダはかかんで金を受け取ろうとしている。

・「ユダの接吻とイエスの逮捕」：この場面は2つのブロックからなる。左側のブロックには剣や鞭を持った3人の兵士が並び、右側のブロックではユダがイエスに口づけしている。そのイエスを兵士の一人が後ろから肩をつかんで捕らえているように見える。

・「ピラトの前に連れて行かれるイエス」：やはり2つのブロックからなる。左側のブロックでは男がイエスの腕をつかんでピラトの前に連行する。右側のブロックではピラトは二人の男にはさまれて椅子に座ってイエスと対峙する。

・「イエスの鞭打ち刑」：イエスは円い柱にくくりつけられている。この場面のイエスの頭には光輪はない。イエスの右側にはこん棒や斧などを持った3人の男が並んでいる。J. Thirion は、この3人の男のブロックは、もともとは「ユダの接吻とイエスの逮捕」の右側にあったのではないかとしている。

・「十字架を担ぐキレネのシモン」：キレネのシモンは、ゴルゴダへの途中で力尽きて倒れたイエスに代わって十字架を担がされたとされる人物である。マタイ、マルコ、ルカによる福音書にそのことが書かれているが、『ヨハネによる福音書』にはこのエピソードは登場しない。フリーズでは2人の刑の執行人がハンマーと釘を掲げ持っており、シモンは大きな十字架を担いで右へ歩みを進めている。

・「イエスの墓を訪れる聖女たちとその前に現れる天使」：聖女たち（『マルコによる福音書』第16章によるとマグダラのマリア、ヤコブの母マリア、サロメ）がイエスの墓の後ろに立っている。墓の左側には番兵がおり、また墓の上にはイエスの復活を告げる天使がいる。その墓（石棺）には丸い文様が8つ並んでおり、その中央にはイエスの遺体を包んでいたと思われる屍衣が掛けられている。

・「香油を買う聖女たち」：イエスの墓を訪れる3人の聖女が、イエスの遺体に塗るための香油を買い求める場面である。順序で言えば、その前の「イエスの墓を訪れる聖女たち」の前に来るべきものである。なお、このフリーズのすぐ下には牛の頭と、厳めしい顔をした人間の頭のモディオンがはめ込まれている。

以上のようなポーケールのフリーズは、そのテーマ、構図、様式、細かい表現の仕方などから、サン=ジル修道院教会の西ファサードの彫刻、あるいはまたイタリア・モデナ大聖堂の中の内陣障壁（pontile または jubé）の彫刻との強い類似性が指摘されている。とりわけサン=ジルとの類似性は濃厚で、サン=ジルの洗練されたそれ（ただしかなり破損している）に比較して、ポーケールのは完成度において劣ることから、ポーケールがサン=ジルの模倣したとされる。W. S. Stoddard は、そこにやはり同じような題材が登場するアルルのサン=トロフィームのクロワトル（北側のギャルリー）を加えて、時系列にしてサン=ジル→アルル→ポーケール→モデナの順であるとしている。彼によれば、サン=ジルの西ファサードの制作年代は1140-1150年頃、アルルのクロワトル北ギャルリーは1150年頃、そしてポーケールのフリーズは1160年

代、最後にモデナのジュベは 1165-1175 年頃である。

かつてエミール・マールはボーケールのこのフリーズに現れるキリストの受難について（サン＝ジルのものも含めて）、北フランスにはこのテーマを扱った彫刻が見られないことから、受難を中心とする挿絵入り写本が 12 世紀初めの南フランスに存在し、それが手本とされたのではないかと推測した。さらにそれらの写本の起源はオリエントやビザンティン芸術にまでさかのぼるものであるとする。であるならば、こうした芸術的系統は、東方からスペインをへて南フランスへ、そしてさらにイタリアへとつながっているということになる。なお、ボーケールのこのフリーズは、コレジアル教会とともに「歴史的建造物」(Monument historique) に指定されている（フリーズは 1906 年、コレジアルは 1942 年）。

ボーケールのコレジアルには、トランセプトのさらに北にある鐘塔の東壁の下から 3 段目の壁面に、ワシとパルメットが彫刻された、やはりロマネスク期の美しい浅浮き彫りのパネルが 5 枚はめ込まれている。このフリーズはかつてのサント＝カトリヌ教会に隣接していたクロワトルから移されたものではないかとされている。それぞれのパネルの図像は様式化されたもので、左右に大きく羽を広げるワシが、パルメットの丸い装飾に挟まれている。



30.3.3b Frise ornée d'aigle

コレジアルの後陣にはやはり 12 世紀のものと考えられるモディオン（植物文様、動物、鳥、ライオン、アトラス、アクロバティックな人など）や、唐草文様のフリーズが埋め込まれている。ただしこの後陣は隣接する学校の敷地の中からはしか見ることができず、通常はアクセスできない。

古いノートル＝ダム＝デ＝ポミエ教会の遺物としては、西ファサードの扉口のタンパンの中央を飾っていたとされる聖母子像もあり、これは 1737 年にその聖堂が壊された際に取り外され、今は城塞通り（rue de Château）の 26 番地にある司祭館（presbytère/Hôtel de Narbonne-Pelet）に保存されている。16 世紀の宗教戦争の際にはすでに聖母とイエスの頭、そして聖母の右手とイエスの左手などが破壊されてしまっていたが、その後修復された。聖母が座る台座は立派なものである。左右に縦筋の付いた柱があり、さらにその上には卵形文様の連なる半円アーチが架かり、一番上は三角形の切妻形となっている。幼子は聖母の左膝の上に座り、聖母の左手がその体を抱いている。聖母の左手は錫杖を持っていたと考えられている。特徴的なのは聖母の両足である。上半身に比して大きなものとなっており、衣服の襷が縦に美しく流れ、シンメトリックな V 字形になったその様子は非常に印象的である。

もともと古い聖堂のタンパンにあったときは、この聖母子像の向かって左側には「マギ（東方の三博士）の礼拝」、そして右側には「ヨセフの前に現れる天使」があったと思われる。この構図は、やはりサン＝ジルの北側扉口のタンパン、また同じガール県ではモンフラン（Montfrin）のノートル＝ダム・ドゥ・マルバ教会 [30.2.19] の扉口のタンパン、オード県ナルボンヌのフ

オンフロワド修道院教会トランセプト小祭室の石板（部分）、また遠くだとイタリアのパルマ（Parma）にある洗礼堂の北側扉口のタンパンなどに見られるものである。サン=ジルでは、聖母子が座る場所は両側に置かれたシンプルな円柱の間に、聖母の姿もボーケールほどシンメトリックではない。サン=ジルのものは保存状態が悪いこともあるが、この聖母子に関する限り、ボーケールのもの方が洗練度が高いと言えよう。ボーケールの聖母子像の下の基壇部分には、聖母の膝の上に父なる神の叡智が宿る、といった意味の碑銘が刻まれている。

Bibliographie :

マール (1996) 58-59 頁、122-125 頁、158 頁、176-177 頁、204-207 頁; Bardy et al. (1966) p.16; Clément (1993) pp.174-176; Droste (1990) p.117; Erlande-Brandenburg (1976) pp.137-138; Germer-Durand (1868) p.23; Goiffon (1901) pp.6-9; Jacquet et Cestin (1977) p.20; Lassalle (1978) pp.143-164; Lassalle (2010) pp.101-102; Lombard et al. (1974) pp.83-95; Nougaret et Saint-Jean (1975) pp.25-26; Pérouse de Montclos (1996) p.150; Ribera-Perville (2013) p.130; Stoddard (1973) pp.179-197; Thirion (1979) pp.522-534; GV; RIP.

### 30.3.3c ボーケール／サン=ピエール=デ=リ ヴ礼拝堂

#### (Chapelle Saint-Pierre-des-Rives, Beaucaire)

ボーケールの旧市街の東端に位置する。西ファサードはミラボー通り (rue Mirabeau) に面し、東側の後陣はローヌ川沿いのダントン通り (rue Danton) に面している。建設は 11 世紀末あるいは 12 世紀とされ、ボーケールでは最も古い聖堂の 1 つである。史料における初出は 13 世紀初めである。もとはボーケールの教区教会でもあった。その後の歴史ははっきりしない。大革命に際して国有財産として売却された。現在はボーケールのコミューンが所有し、集会や各種文化イベントのために利用されている。

古典様式で作られた西ファサードの扉口は 17 世紀、3 ベイからなる身廊部は 16 世紀で、半円形の内陣部分を取り囲む壁（つまり後陣壁）だけが 12 世紀ロマネスク期のものである。後陣には水平のコーニスの上に半ドームが架かるが、そのコーニスのすぐ下という高い位置に、以前は半円頭形の大きな窓が 3 つ開けられていたが、今は左右両側の窓は埋められている（隣接する建物があるため）。また中央の窓の下には、20 世紀（あるいは 19 世紀後半頃）になって方形の大きな出入口が開けられた。南側のかつての窓の下には半円頭形のニッチが 2 つ並んでいる。

この後陣は、外側は五角形で、上半分は中石材がきっちりと積まれたものとなっている。壁面には要塞化の手が加えられた名残も残っている。また五角形の北東角と南東角の上部には小さなガーグイユ（水落とし）がはめ込まれている。

Bibliographie :

Goiffon (1901) pp.7-8.

Web-site :

Base Mérimée (Chapelle Saint-Pierre-des-Rives, Beaucaire) ; Site officiel de la Mairie de Beaucaire.

### 30.3.3d ポーケール／サン=ジャック・ドゥ・ソジャン礼拝堂

#### (Chapelle Saint-Jacques de Saujan, Beaucaire)

ポーケールから県道 D15 で約 700 メートル南に行ったところに、「クロワ・クヴェルト」(Croix couverte) と呼ばれるモニュメンタルな十字架が立っている。ロマネスクではなく、14 世紀のゴシック期に建てられたもので、南フランスでは、他にベルヌ=レ=フォンテーヌ (ヴォークリューズ県) やアノー (アルプ=ドゥ=オート=プロヴァンス県) などに残っている。これらは街や村の郊外の街道沿いや十字路といった場所に十字架を立て、それを石造りのポーチで覆うというものであるが、ポーケールではそのポーチの平面プランが三角形となっており大変に珍しい。またその保存状態が抜きん出て良好で、ポーチの装飾なども見事なものである。

「クロワ・クヴェルト」から D15 をさらに 8.5 キロほど南に行くと、ソジャン地区の県道沿いの東側にサン=ジャック=ドゥ=ソジャン礼拝堂が建っている。フルクをへてアルルまでは約 8 キロなので、ポーケールとアルルの中ほどの、少しアルル寄りの位置にあたる。礼拝堂からローヌ河岸までは約 200 メートルである。A. Michelozzi によれば、ソジャンという地名が最初に史料に現れるのは 824 年のこととされる。1212 年、マリー・ドゥ・ラ・トゥール (Marie de la Tour) という女領主が、聖ヤコブに捧げられた礼拝堂を建設するためにこの土地を寄進した。さらにその後、建てられた聖堂のために若干のブドウ畑もその寄進に付け加えている。そのようなわけでこの礼拝堂の建設は 13 世紀初め頃で、ロマネスクの末期にあたる。ただし E. Goiffon は、この地に聖堂が建てられたのは 12 世紀前半のことで、カドネ・ドゥ・ベルトランとレーモン・ドゥ・タラスコンという二人の騎士によるものであるとしている。ソジャンはその時にはすでにレランス修道院の所有する土地であったので、彼らはアルル大司教の同意のもと、1135 年にこの礼拝堂をレランス修道院に寄贈したのだという。A. Michelozzi と E. Goiffon の主張する建設年代にはおおよそ 1 世紀の隔りがあるが、すくなくともその建築様式 (とりわけ尖頭ヴォールトの採用など) を見る限り、少なくとも現在目にする建物の建設は、やはり 13 世紀前半と見るのが妥当ではないかと思われる。

いずれにせよ建設された後はアルル大司教区内の教区教会となり、その後 1226 年にはレランス修道院 (プロヴァンス東部、カンヌ沖合のサン=トノレ島) の所有となった。16 世紀の宗教戦争の際にはプロテスタントからの攻撃に対するカトリック側の防御施設のような役割を果たしている。大革命の後、ニーム司教区に編入され、ポーケールのサン=ポール教区教会に付属するが、その後はポーケールのコミュニオンの所有となった。20 世紀の間はかなり荒廃が進んだが、2011-2013 年に大々的に修復工事が行われ、建物の内外がきれいに整えられた。現在は各種の文化イベントなどに利用されるほか、祭事も執り行われている。

県道に面した西ファサードはいたってシンプルで、扉口には半円アーチが架かり、さらにそのアーチを半円形のモールディングが縁取っている。そのモールディングはアーチの起拱部で 30 センチほど水平化して終わっている。ファサードの上部は三角形の切妻形で、高い位置に丸窓が開けられている。窓自体は円形であるが、よく見ると外側を縁取るモールディングは 14 面からなる多角形である。聖堂の南側には 18 世紀に建てられた旧司祭館が隣接している。北側には低い壁で囲まれた墓地があり、その一番奥には尖塔が載せられた大きな墓石が



30.3.3d Saint-Jacques de Saujan

2 つ並んでいる。聖堂の北壁には扶壁が 4 つ付けられている。窓などはないが、足場を組むためのものと思われる四角い小さな穴が所々に開けられている。そうした穴は、特に東側のベイの外壁に多く見られる。後陣は半円形で、身廊部の壁と同じように中石材がきれいに積まれている（とりわけ中程の高さから上の部分）。後陣の東端（中央）の低い位置に、半円頭形の細長い小さな窓が開けられている。頭部はモノリスである。この窓はかなり傷んでいたが、2011-2013 年の修復によってきれいに形が整えられた。後陣の上の壁には半円頭形の窓が開けられ、切妻となった屋根の上には、やはり頭部が三角形の鐘楼が載っている。

礼拝堂内部は 3 つのベイからなる身廊とその東側に半円形の後陣が続くというシンプルなものである。装飾の類いはまったく見られない。天井は水平のコーニスの上に、わずかに尖頭形となったトンネル・ヴォールトが架けられている。ベイを分けるのは 2 つの横断アーチで、方形のインポスト（コーニスの一部）を介してそれを受け止めるピラストルは、途中で斜めに切られており床までは下りていない。各ベイの南北それぞれの側壁には半円形の壁アーチが 1 つずつ付けられている。西側の 2 つの壁アーチの起点部分には、コルボー（corbeau）またはクラヴォー=コンソール（claveau-console）などとも呼ばれる突き出しが付けられている。これは壁アーチを作るときに用いた木組みの枠を支えるためのものであったと思われる。南側の 3 つの壁アーチには、それぞれかつて開けられていた半円頭形の窓の痕跡が残されている。現在は旧司祭館の建物が隣接するために埋められている。南側の中央の壁アーチには、説教壇が備え付けられている。また身廊の北西の端には洗礼盤が置かれている。最も東側のベイは、その西側の身廊部分よりも床面が少しだけ高くなっているが、この部分に祭壇などが置かれていたとすると、このベイはいわゆる内陣であるとも見られる。ただし筆者が訪れた 2013 年の時点では祭壇などは何も置かれていなかった。この東端のベイの南側の壁には、かつては隣接する旧司祭館との間を行き来するための方形の出入口が開けられていたが、現在は完全に埋められている。

二重のアーチを介して身廊の東に続く後陣は、半円形平面で、その上には半ドームが載る。この後陣壁の低い位置には内側に向けて大きく隅切りされたロマネスク様式の半円頭形の窓が

開いている。高さのある凱旋アーチには中央上部に半円頭形の窓が開けられている。その窓のすぐ手前（西側）には、鐘を鳴らすためのロープを通す穴が3つ開けられている。

Bibliographie :

Goiffon (1901) pp.21-23; Michelozzi (2008) pp.225-230; RIP.

### 30.3.3e ボーケール／サン＝ピエール＝ドゥ＝カンピュブリック礼拝堂

#### (Chapelle Saint-Pierre-de-Campublic, Beaucaire)

ボーケールから県道 D15 を南へおよそ 2.5 キロで東に折れる。50 メートル進んだところで南に入る私道があるので、それをさらに 200 メートル行くとサン＝ピエール＝ドゥ＝カンピュブリック礼拝堂に至る。ただしその私道に入るところからは私有地となり（フェンスと門がある）、通常そこから先には入れない。

この礼拝堂の名が史料に最初に現れるのは、ここにあった「カンポピュブリコのウィラ」(villa campopublico) の土地を、アルル伯（またはプロヴァンス伯）レーブルフ (Leibulfe) が、アルル大司教ノトン (Nothon) の所有するロヌス左岸の土地と交換するために交わした 824 年の文書においてである。その頃に建てられていた礼拝堂には、ペトロ、ヨハネ、そして聖母マリアに捧げられた 3 つの祭壇が置かれていたようである。しかしこの古い建物はその後消滅し、11 世紀になって 3 廊式で再建された。身廊部の東側には半円形の主後陣とその左右に同じく半円形の小後陣が並ぶというもので、教区教会としての役割も果たした。1193 年にアルル大司教アンベール・デギエール (Imbert d'Eygüières) は、この土地と礼拝堂をテンプル騎士団に譲る。騎士団はここに小規模なコマンドリーを作り (1202 年にはそれが確認できる)、サン＝ジルにあった同騎士団の上級コマンドリー (南仏の管区を統括) の管理下に置かれた。理由ははっきりしないが、12 世紀終わり頃あるいは 13 世紀初め頃に、礼拝堂の北側の側廊と小後陣が取り壊されている。1307 年にテンプル騎士団が壊滅すると (ボーケールのセネシャル管区においては、66 名のテンプル騎士が逮捕されたと言われる)、カンピュブリックの土地と礼拝堂、そしてコマンドリーは 1312 年に聖ヨハネ騎士団に引き継がれた。聖ヨハネ騎士団は、それ以前からこの周辺に土地を所有していたが、コマンドリーと礼拝堂はこの時に正式にこの騎士団の所有となった。16 世紀の宗教戦争期には、礼拝堂はプロテスタントによる略奪と破壊の被害を受けている (特に 1569 年)。その後、身廊を切り詰める形で再建されるが、大革命の後の 1790 年に国有財産として売却され、19 世紀中頃にはコマンドリーの建物も取り壊された。礼拝堂は現在は個人所有で、農家の倉庫として使用されている。

現在残るのは、12 世紀末あるいは 13 世紀初めに北側の側廊が失われて 2 廊式となった後、さらに 16 世紀に身廊が 2 ベイに切り詰められたものである。身廊の東側には主後陣とその南に小後陣が付けられている。西ファサードは三角形の切妻屋根で、中央下部に大きな方形の出入口が開けられている。その上には尖頭形となったモールディングによるライズの低いセグメンタル・アーチが架かる。かつてそのアーチを受けていた左右の側柱は、今は失われている。

タンパン部分は無装飾である。さらにその上には西ファサードの中心軸から北側に少しずれた位置に長方形の大きな窓が開けられている。より正確には窓というよりも、干し草を建物の中に搬入するための開口部で、19世紀前半のものである。切妻の頂部には、19世紀半ば頃までは小さな鐘楼が立っていたが、今は見られない。

聖堂の南北の側壁は、整形された中石材がきっちりと積まれた部分とそうでない部分が混在している。北壁には大きな長方形の窓が2つ開けられているが、現在は共に埋められている。南壁には向かって右側（東側）に半円頭形の細長い窓があげられ、向かって左側（西側）には方形の窓が開けられているが、この方形の窓は今は埋められている。また南壁の東端の下部には、半円形のアーキヴォルトが架けられた出入口が見られる。これも今は埋められている。

礼拝堂の東側には半円形の主後陣と、それより小さな小後陣が並んでいる。ともに12世紀末あるいは13世紀初め頃のものである。主後陣は、より正確には多角形で9面からなる（北東側から見るとそれがよく分かる）。整形された中石材がていねいに積まれており、東端中央部には、内部に向けて大きく隅切りされた半円頭形のロマネスク様式の窓が開く。頭部のアーチ部分はクラヴォーがきれいに組まれている。ただしこの窓も今は埋められてしまっている。主後陣の南側に並ぶ小後陣の方は、あまり整形されていない小石材が積まれており、開口部なども見られない。

聖堂内部は単身廊形式である。かつては主身廊の南北にそれぞれ側廊が並んでいたが、北側の側廊がなくなり、さらに南側の側廊との間の隔壁が取り払われたことで事実上の単身廊となった。さらにかつては3ベイからなっていた身廊部であるが、宗教戦争の際に破壊され、一番西側のベイを切り詰めて再建されたために、現在の身廊は2ベイからなる。南側の壁には、ローヌ川下流域のこの地方では比較的珍しい馬蹄形の壁アーチが並んでいる。馬蹄形アーチはフランスではピレネー地方のプレ・ロマネスク、あるいは初期ロマネスクの聖堂に見られるものである。A. Michelozziなどはこのことから（そしてまた石積みの様子から）、現存するカンピュブリックの礼拝堂の、少なくともこの側壁部分（そして南側小後陣の外壁部分）は11世紀半ば頃のものであるとしている。

主後陣およびその南側の小後陣には、12世紀末あるいは13世紀初め頃のフレスコ画が描かれていた。1925年に発見された後そこから剥がされて売却され、ダブリン（アイルランド）のナショナルギャラリーに収められた。主後陣の半ドームに描かれていたのは「栄光のキリスト」である。キリストは「8」の字の形をした二重のマンドーラの中に座り、左手に福音書を持ち、右手をあげて祝福のポーズをとっている。キリストは4つのテトラモルフ（四大福音書記者）に囲まれており、その周囲には星が散りばめられている。キリストの頭上（後陣の半ドームの頂部）には丸い輪に囲まれて、先端が広がった十字（*croix pattée*）が置かれている。水平に付けられた波状文様の帯の下には左右に3人ずつ使徒や聖人が並ぶ。向かって左側にはパウロ、ヨハネ、ラウレンティウス、右側には中央に鍵を持つペトロがいるが、彼の両側にいる2人の聖人の名前は不明である。これらの人物たちの周囲には、今度は三つ葉飾りが散りばめられている。さらにこの下にもフレスコ画が描かれていたと思われるが、失われてしまっている。

小後陣に描かれていたフレスコ画は向かって左側が「受胎告知」、右側が「マギの礼拝」であ

る。マリアに受胎を告げる大天使ガブリエルは左手にバトンを持っている。「マギの礼拝」では幼子イエスを膝に抱いたマリアに、東方からやって来た 3 人のマギが、それぞれ捧げ物を持って礼拝をしている。彼らは頭に王冠をかぶり、その頭上にはひときわ大きな星が輝いている。半ドーム部分には逆三角形文様が連なる帯の上に星が瞬く。中央に半円形で描かれているのは、光を放つ太陽であろうか。この小後陣においても、さらにその下にフレスコ画が描かれていたが、聖人らしき人物たちの光輪や司教のミトラなどが断片的に残るのみである。なお A. Michelozzi によれば、主後陣半ドームのキリストの上に描かれた十字や、小後陣の聖母マリアのテーマなどは、この礼拝堂が 12 世紀末あるいは 13 世紀初め頃にテンプル騎士団のものであったことをよく示すものであるという。

**Bibliographie :**

Carraz (2014) p.117; Carraz (2020) pp.95-97, pp.130-134; Carraz et Mattalia (2016) pp. 47-68; Goiffon (1901) pp.19-20; Michelozzi (2007) pp.19-34.

**30.3.3f ボーケール／サン＝ローマン修道院 (Abbaye de Saint-Roman, Beaucaire)**

ボーケールからは直線距離にして北西へおよそ 5 キロのエギーユ山塊 (Massif de l'Aiguille) の一角にある。ボーケールの西 2.5 キロにある県道 D90 と D999 が交わる大きなロータリーから北へさらに 2.8 キロ行くと、左 (西) に入る「サン＝ローマンの道」(chemin de Saint-Roman) がある。それを 1.5 キロほど登ると開けた駐車場となり、そこからは徒歩である。岩山に向けて歩くこと約 5 分でサン＝ローマン修道院に至る。

南北約 120 メートル、東西は最も広いところで約 60 メートルという南北に長い台形状の岩山の中をくり抜いて、まるで洞窟のように作られた修道院の遺構である。このような修道院は、フランスは言うに及ばず、ヨーロッパでも珍しく、トルコの Cappadocia を連想させる奇異なものである。実際、5 世紀頃には東方からやって来た隠修士がここで隠修生活を送っていたとされるが、伝説によれば、同じ頃サン＝ローマン、すなわち聖ロマヌス (saint Roman / Romain) がここに住み着いたとも言われる。同名の聖人は複数いて、そのうちジュラで修道院を建立したロマヌス、あるいはローマで (聖ラウレンティウスとともに) 460 年頃に殉教したロマヌスとされる。

その後 7 世紀頃から 9 世紀頃にかけて、ベネディクト派の修道士たちがこの岩山に僧院を営むようになった。1102 年、アルル大司教ギベリン・ドゥ・サブラン (Gibelin de Sabran / 在位 1080-1107 年) の主導により、ブサルモディ



30.3.3f Abbaye de Saint-Roman

修道院 (Abbaye de Psalmody / エグ=モルトの北東約 6 キロ) の所有する小修道院 (プリウレ) となり、その管轄下に置かれた。小修道院長もプサルモディ修道院長によって任命された。J. Roche によれば、13 世紀末頃に修道士たちが一時期ここから放逐されるということもあったようであるが、それについての詳しい事情は不明である。1310 年に国王フィリップ 4 世が、ニームとボーケールのセネシャルにサン=ローマン修道院の再建を命じたという。1365 (または 1363) 年頃には、アヴィニヨンの教皇ウルバヌス 5 世がここに学修所 (studium) を置いた。これは子供たちや将来修道士を目指す若者たちのための一種の学校で、生徒の出自の貴賤や貧富は問われなかったという。14 世紀になると城塞化され、周囲には濠も巡らされた。台地の北側から西側にかけての崖の上などに、城塞化されていた頃の銃眼の開けられた壁が残っている。それでも百年戦争の際には、南フランスのこのあたりを荒らし回った傭兵くずれの野盗によって攻撃され被害を受けている。

1537 年にプサルモディ修道院が世俗化 (sécularisé) されると、サン=ローマンの修道士たちもここを離れた。翌年、エグ=モルトの裕福な資産家がここを買い取り、小さな城を建てた。16 世紀の宗教戦争期には、例えば 1574 年に、プロテスタントによる攻撃を受けて占拠されている。1632 年、ガストン・ドルレアンがラングドック総督アンリ・ドゥ・モンモランシー (2 世) とともに自分の兄である国王ルイ 13 世とその宰相リシュリューに対する反乱を引き起こし、ほどなく鎮圧されているが、その際ガストン・ドルレアンは、しばらくの間このサン=ローマンの城塞に逃げ込んでいたとも言われている (モンモランシーはトゥールーズで処刑された)。その後、サン=ローマンの城塞は居住性の高められた城館として整備されて 18 世紀後半まで存続するが、大革命によって国有財産として売却された。革命の後は目まぐるしく所有者が変わるが、荒廃した修道院と城館は格好の石切り場となり、19 世紀半ばには城も取り壊されて完全に廃墟化してしまった。ようやく 1960 年代になって考古学的な調査が始められ、1988 年にはボーケールのコミューンの所有となった。その後は駐車場やそこからの上り道などが整備され、現在はボーケールの観光名所の 1 つともなっている。

南北に長い台形状の岩山の西側に、訪問者用の鉄製の螺旋階段があり、それを登るとこの洞窟修道院礼拝堂 (chapelle) の入口となる。南北に長い回廊 (esplanade) に面して開けられたヴォールトの架かる入口 (かつての扉口自体は失われている) から中に入ると、そこは全長約 24 メートルのいわゆる身廊部分である。その左 (北) 側には、側廊が並んでいる。身廊には石段が付けられていて、それを上ってと奥に進むと、太い 4 分交差リブが架けられた、いわゆるトランセプトの交差部となる。さらにその奥には壁面に大きさの異なるニッチが付けられた部屋が 2 つ続く。注目すべきは、この交差部の南側の部屋 (南側のトランセプトに相当) の南壁に付けられた 12 世紀のものと考えられる修道院長座である。この洞窟礼拝堂の中で、唯一と言って良い装飾の施されたもので、上部は半円形のくり抜きで (塔頂部に四角いニッチがある)、その下には、腰の部分に縦溝が並び、さらに一番下の足の部分は 3 つの小アーチが並ぶアーケード文様となっている。この院長座の向かって右隣には、それよりも小さめの半円頭形の座席 (ニッチ) が付けられている。こちらは無装飾である。副院長格の修道士が座るためのものであろうか。

リブが架けられた交差部のすぐ北側には、あたかも小後陣のように半円ドーム形となったニッチがある。現在そこには、かつてこの岩山の上のテラスのクロワトル（回廊）にあったとされる 11 世紀頃の柱頭が置かれている。大きな立方体で、冠板部分にシンプルなモーディングが付けられ、さらに各面を縁取るように、中に小穴が開けられた小さな菱形文様が連続する線刻が施されている。北側の側廊の西奥には、2 つ並ぶ丸いニッチの間の高い位置に、10 個の小穴が並べて掘られた



30.3.3f Abbaye de Saint-Roman

石の出張りが見られる。正確な用途は不明であるが、恐らくは安置された死者を照らすローソクやランプを置いた一種の灯明台のようなものだったのではないと思われる。実際、聖堂内の床にはいくつもの墓の穴が開けられている。そのうち交差部にあるものには、言い伝えによれば、聖ロマヌスの右腕の骨と聖トロフィームの右足の骨を入れた聖遺物容器が収められていたという。その墓の上には石の蓋を置いたのであるが、その横から手を内部に差し入れるための穴が床面に開けられている。中世の間、これらの聖人の聖遺物に触れることを望んで多くの巡礼もやって来たというが、この穴はそうした巡礼たちのために開けられたものと考えられる。

洞窟礼拝堂の南側には大広間 (*grande salle*) がある。長さ 18 メートル、床面部分の幅は 6 メートル、そして高さは約 20 メートルもあって、岩山の中を掘ってこれだけ大きな空間を作るには大変な労力と時間がかかったものと思われる。東西両側の壁面には半円形の壁アーチの痕跡と、アーチの起点にあったモディオンが残されており、さらにその上にはヴォールトの起拱部分も残っていて、この空間が 3 層構造であったことが分かる。かつては最上層にあったと思われる集会室と洞窟礼拝堂との間で行き来ができたが、現在はこの広間の南端の下に出入口が開けられている。1 階部分は、洞窟のものとは別に作られた礼拝堂でもあったようだが、それ以外に厨房、倉庫、食堂、集会室、そして厩舎など、時代の経過とともにさまざまな用途に用いられたのではないかとされている。この大広間のすぐ北東には、ブドウの実を搾るために使われた部屋 (*pressoir*) も残されている。圧縮機をはめ込んだ穴が壁に残されている。洞窟礼拝堂の中、あるいは岩山の南側の岩場には修道士たちの独居房 (*cellules*) がある。断崖の南側の独居房には縄ばしごを使って出入りしていたという。

台地の上のいわゆるテラス部分には、修道士たちの墓の穴が数多く残されている。岩盤に人の形に掘られた墓が所狭しと並べられている様子は非常に印象的である。14 世紀以降、この場所が城塞化されると、多くの墓が破壊されたというが、それでも今日残るその数は全部でおよそ 150 である。そのうちおよそ 3 分の 2 は、岩山の北東部分に集まり、残り 3 分の 1 は南端側に作られている。

例えばアルルのモンマジュール修道院などにも同じような墓が見られるが、数はこちらの方が多し。中には近隣の農民の墓もあったと言われる。小さな墓穴もいくつも見られ、これは 14 世紀にここに作られた学修所の生徒たちのものであったのかも知れない。



30.3.3f Abbaye de Saint-Roman

Bibliographie :

Barbut (2010) pp.36-39; Bardy et al. (1966)

pp.45-46; Clément (1993) pp.78-80; Goiffon (1881) p.343; Goiffon (1901) pp.14-16; Roche (1979) pp.114-125; Roche (2009) pp.3-32; RIP.

Web-site : Base Mérimée (Site archéologique de Saint-Roman d'Aiguille) ; « Abbaye de Saint-Roman » par Paul Courbon; Site officiel de la Mairie de Beaucaire.

### 30.3.4 ジョンキエール=サン=ヴァンサン／サン=ローラン礼拝堂

#### (Chapelle Saint-Laurent, Jonquières-Saint-Vincent)

ジョンキエール=サン=ヴァンサンは、ボーケールから西のニームに向けて県道 D999 を約 8 キロである (ニームからは約 18 キロ)。サン=ローラン礼拝堂は、ボーケールから向かうと、ジョンキエール=サン=ヴァンサンの集落に入る手前の、D999 と D102 が交わる大きなロータリーの東およそ 500 メートルの県道沿いの開けた場所に建っている (D999 から 30 メートルほど北に入る)。ボーケールとニームを結んでいた古代のドミティア街道は、この場所から南へおよそ 1.5 キロのところを通っていた。礼拝堂内部にはこのドミティア街道から移されたマイルストーンがあって、柱として再利用されている。

礼拝堂の北に隣接して古代ガロ=ローマ時代の墓地も見つかっており、古くからこの場所が聖域であったことがうかがえる。現在残るサン=ローラン礼拝堂の建設は 11 世紀後半にさかのぼり、ここにあった小修道院 (プリウレ) の付属聖堂であった。この小修道院はボーケールの北のサン=ローマン礼拝堂 [30.3.3f] の所有であったが、サン=ローマン修道院が 1102 年にブサルモディ修道院の傘下に移された際に、このサン=ローラン礼拝堂もブサルモディのものとなった。同じ頃 (12 世紀以降)、最初の改修が行われたとされる。この場所の北側には 19 世紀半ば頃まで沼地が広がっており、その周辺に集落を営んでいた漁師たちのための教区教会としての役割も果たしていたと言われる。しかし 13 世紀にジョンキエールの村の中の、城塞のすぐ東側にサン=ミシェル教会が建てられてからは、教区教会としての役割はこのサン=ミシェルが担うこととなり、サン=ローランでの祭式は次第に祝日などに限られるようになっていった。

なお現在のサン=ミシェル教会は、19世紀になって古い建物を取り壊して新しく再建されたものである（サン=ローランの集落も18世紀後半には消滅している）。サン=ローラン礼拝堂を含めてこのジョンキエールの教区は、大革命期までアルル大司教区に属し、その意味ではローヌ右岸に位置しながら、宗教的・文化的にはプロヴァンスにも含まれるという性格を維持し続けることとなった。大革命以降はニーム司教区に移されている。

16世紀から始まる宗教戦争の際には、この地方の多くの聖堂が大なり小なり被害を受けたのであるが、サン=ローランもまた例外ではなかった。とりわけ1636年の被害が大きかったが、その後アルル大司教の主導により修復工事が行われた。現在の扉口のリンテルには1818年という数字が刻まれており、その年にも修復工事が行われたことが知られる。最近では、この礼拝堂を所有するジョンキエール=サン=ヴァンサンのコミュニョンによる大々的な修復工事が2010年から行われている。

現在のサン=ローラン礼拝堂は、平面プランが2ベイからなる身廊とその東側に半円形の後陣が付くというシンプルなもので、その大きさは後陣を含めた東西がおよそ15メートル、南北5.5メートルである。もともと身廊は3ベイであったが、19世紀の修復の際に2ベイに切り詰められた。かつての西端のベイの外壁の名残が、現在の西ファサードの向かって左側の下部にわずかに残っている。したがって、西ファサード全体も19世紀に再建されたものである。不整形の小石材が不規則に積まれており、開口部はない。扉口を含む西側のベイの南壁も同じ時に再建されている。

身廊の側壁には、北側には3つ、南側には2つの扶壁が付けられている。石積みは、南北ともに西ファサードのそれとほぼ同じであるが、北側の側壁には中ほどの高さの所に、いわゆるヘリンボーン式の石組み（opus spicatum）が見られる。またこの北壁には足場を組むための小穴が数多く開けられている。南壁には、各ベイに1つずつ、半円頭形で細長い窓が開けられており、扉口もこの南壁の西のベイに開けられている。扉の上には水平のリンテルが置かれ、先にも触れたようにそこには修復工事が行われた年を表す「1818」という数字が印されている。そのリンテルのさらに上には、マルタ十字が見られる。これは19世紀の修復の際に、かつて礼拝堂の北に隣接していた墓地にあった円形墓石を転用してはめ込んだものである。東端の後陣は半円形で、やはり不整形の小石材が乱積みされている。その中央には半円頭形の細長いロマネスク様式の窓が開けられている。頭部は一枚岩のリンテルであるが、線刻されたクラヴォーが並んでいる。サン=ローマン礼拝堂で特徴的なのは、この後陣の上の、いわゆる凱旋アーチ外壁に半円アーチが3つ並ぶアーケードである。この3つのアーチは、すべて水平のインポストを介して方形の柱が受けとめる形になっている。アーチ自体は3つともニッチであるが、中央のものだけは、アーチを受けるインポストより下の位置に長方形の開口部がある。またその開口部の上には三角形のリンテル（そこには三角形が三重に線刻されている）が載せられている。この三角形は、P.A. Clémentによると「三位一体」を表しているものであるという。後陣壁の上は三角形の切妻となり、さらにその上には以前は高さのある鐘楼が立ち上がっていたが、現在残るのはその鐘楼を支えていた2つの方形の柱のみである。

礼拝堂内部は、2010年からの修復によって壁面などがきれいに整えられている。2ベイの単

身廊と半円形の後陣からなる。身廊は先にも触れたように、もともとは3ベイからなっていたが、19世紀に一番西側のベイが取り壊された。現在の身廊内部の東西は13メートルである。2つのベイのうち、後陣に接する東側のベイの天井は半円筒形のトンネル・ヴォールトであるが、西側のベイのかつてのヴォールトは失われており、現在は木造となっている。身廊と後陣の境にある凱旋アーチを左右で受け止めるのは、ドミティア街道に立っていた古代のマイルストーンである。高さは



30.3.4 Jonquières-Saint-Vincent

約2.5メートルで、その上部に印されている碑文から、クラウディウス帝（在位41-54年）治下のものであると知られる。11世紀後半に最初に礼拝堂が建設された後、12世紀になって身廊部の天井の改修、凱旋アーチのかさ上げ、鐘楼の設置、内陣部の手直しなどが行われているが、マイルストーンが組み込まれたのもその時期のことであると考えられる。マイルストーンの上には凱旋アーチを受け止める柱頭があり、北側のそれには葉を広げるアザミが、また南側の柱頭には図形化されたアカンサスが彫刻されている。

凱旋アーチの東側は、身廊の床面から2段高くなった内陣である。それを取り囲む半円形の後陣壁の中央には、半円頭形で内部に向けて隅切りされたロマネスク様式の窓が開く。その上には半ドームが架かる。凱旋アーチの上は、天井のヴォールトまでの間に高さのある壁面が立ち上がり、方形の開口部が見られる。これは先に触れたように、凱旋アーチ壁の外側に3つ並ぶアーケードのうちの、中央のアーチの下に開けられたものである。

南北の身廊側壁には、各ベイに馬蹄形の壁アーチが付けられている。この近くではボーケールのサン=ピエール=ドゥ=カンピュブリック礼拝堂 [30.3.3e] にも見られるものである。この馬蹄形アーチの存在から、礼拝堂の建設年代を11世紀前半、あるいはさらにその少し前とすることも可能かも知れない。これらの壁アーチやヴォールトに架けられた横断アーチは、それぞれインポストを介してピラストルが受け止めるが、それらのインポストには、ひねり紐文様やビエット、三角形のギザギサ文様、横向きに連なる植物の葉、円筒形のモールディングなどが彫刻されている。

#### Bibliographie :

*AR*, no.91, pp.12-13; Buholzer (1962) p.122; *CAG (30/2)*, pp.393-395; Clément (1993) pp.80-82; Lontcho (2000) p.16; Germer-Durand (1868) p.108; Goiffon (1881) p.143; Mazier (1990) pp.18-49; Michelozzi (2002) pp.22-24; Michelozzi (2004) pp.27-44.

Web-site : Base Mérimée (Chapelle Saint-Lourent)

### 30.3.5 ベルガルド／サン=ヴァンサン・ドゥ・ブルッサン礼拝堂

#### (Chapelle Saint-Vincent de Broussan, Bellegarde)

ベルガルドはニームから県道 D6113 で南東へ約 18 キロ、ポーケールからは D38 を南西へ約 13 キロであるが、サン=ヴァンサン・ドゥ・ブルッサン礼拝堂は、このベルガルドのコミュニティ域の西端に位置しており、D38 をさらに西へ 4 キロ進む。オートルート（高速道路）A54 をくぐる手前（東）およそ 300 メートルのところを北に入る。100 メートルほど小丘を上ると、大きな農家の敷地の一角に建つロマネスクの礼拝堂が現れる。

もともとここには古代ガロ=ローマ時代のウィラがあった。11 世紀になってそこに小修道院（ブリウレ）が作られた。1096 年にトゥールーズ伯レーモン 4 世サン=ジルがベルガルドの所領をニームの司教座聖堂参事会に寄進したとされるが（ニーム大聖堂[30.3.1a]を参照のこと）、小修道院の名が参事会所有のものとして史料に初めて出てくるのは 1156 年のことである。百年戦争や宗教戦争で被害を受けたが、1609 年に修復工事が行われている。大革命の後、小修道院は国有財産として売却された。その後は、それまでもベルガルドの領主であったユゼスクリュソル家がここを手に入れるが、実際の所有者は 19 世紀を通じてこの一族の中で目まぐるしく変わった。2022 年現在の所有者はロジェ家である。礼拝堂の建物は 20 世紀末までは農家の倉庫などとして使用されていたが、2007 年から修復工事が進められ、屋根や外壁などが直され、さらに 2014-2015 年には内部のヴォールトや壁面などが大々的に修理された。

現在の礼拝堂は全長が 22 メートルあまりで、3 ベイからなる身廊の東側に半円形の後陣が付く。後陣と身廊北側は農家の敷地の内側に入り込んでおり、扉口が開く身廊の南側がその敷地の外壁を形作る格好になっている（身廊北側は農家の建物が直接建てられていて見ることはできない）。後陣は整形された中石材がきれいに積まれており、中央には外側に向けて隅切りされた半円頭形で細長いロマネスク様式の窓が開く。その窓は、一番内側のモールディングも含めて三重の枠に縁取られる形になっている。後陣の上部には彫刻の施された小さなモディオンが並んでいる。全体的に摩耗が激しいが、一部に花卉や植物文様などが見られる。身廊部南側の壁の上部には、一枚岩で切り出された小さな半円アーチが、いわゆるロンバルディア帯のようにアーケードとなって並んでいる。これはこの近くでは、例えばエロー県モンペリエ近郊のバヤルグにあるサン=タントワヌ=ドゥ=ラ=カドゥール礼拝堂（Saint-Antoine-de-la-Cadoule, Baillargues）などによく似ている。ベルガルドでは、これらの小アーチを受けるモディオンにさまざまな彫刻が施されている。図形化されたアカンサス、渦巻き、パルメット、花卉、上下に重なったピエットなどであり、12 世紀の聖堂建築にしばしば見られる装飾である。ただしこれもまた全体的に摩耗が進んでいる。中央のベイの上には、コルボーが 3 つ残されている。百年戦争あるいは宗教戦争の時代に一時的に要塞化され、マシクーリなどを支えていた名残であろうか。

身廊南壁の、一番東側のベイにはゴシック様式で尖頭形の大きな窓が開けられている。この窓にはステンドグラスがはめられており、また窓の上部はランブラージュ（トレーサリー）で飾られている。中央および西側のベイの壁面には、それよりも小さなロマネスク様式の窓がそれぞれ 1 つずつ開けられている。扉口（ポルタイユ）は、中央のベイの下にある。扉の左右に

は基壇の上に円柱が立ち、インポストを介して三重になった半円形のアーキヴォルトのうちの内側の 2 つを受け止めている。その円柱の柱頭彫刻は、図形化されたパルメットが上下 3 段に重ねられており、そのうち上段あたりには小穴 (trous de trépan) がいくつも開けられている。この柱頭彫刻には、文献によればオランス (祈る人) が顔を現しているとされるが、柱頭自体の傷みが進んでいることもあって、筆者には確認できなかった。アーキヴォルトは一番外側のものは大きなクラヴォーが並ぶ無装飾のアーチで、真ん中のは円筒形のモールディング状のやはり無装飾のヴシュールである。最も内側のヴシュールは 3 本からなる組紐文様が連続するというもので (向かって左端は失われている)、やはり小穴が多数開けられている。扉口の上のタンパンとリンテルは無装飾である。



30.3.5 Saint-Vincent de Broussan

礼拝堂の西壁 (南西端の扶壁は下部が小さくなっている) は、農家の建物が直に隣接しているために全体を見ることはできないが、その上部は切妻となっており、後陣のものと同じ仕様のロマネスク様式の窓が開けられている。ただしこちらの方が後陣のものよりも縦長である。礼拝堂の北西端には、小さいがすなりと高さのある鐘楼が立つ。鐘を吊すためのベイが置かれた基壇部分には、半円形のニッチの小アーチが並んでいるのが見える。こうした鐘楼基壇のアーケードは大変に珍しいものである。

礼拝堂内部は、かつては亀裂などが目立ったが、2014-2015 年の工事によって修復され、壁面などもきれいに塗り直された。身廊は 3 ベイからなり、天井には水平のコーニスの上に半円筒形のトンネル・ヴォールトが、そしてこのヴォールトにはベイを区切る 2 つの横断アーチが架けられている。各ベイには南北それぞれに半円形の壁アーチが並んでいる。東側のベイの南壁には、先に触れたようにゴシック様式の大きな窓が開けられ、また中央および西側のベイの南壁の上部には、隅切りされたロマネスク様式の窓が開けられている。礼拝堂内部の北西の端には、鐘楼に登るための階段の入口が作られている。西壁の上部には、外部に向けてと同じく内部に向けても隅切りされたロマネスク様式の窓があり、一番下には半円頭形の出入口が残されているが、現在は埋められている。また中央のベイの北壁には、中ほど少し下のところに半円頭形の小さなニッチが付けられ、さらにそのすぐ下には、ゴシック様式の碑文が刻まれた長さがおよそ 2 メートルの石板が埋め込まれている。1570 年のものとされ、もとはベルガルドの城にあったがここに移し替えられたのだという。

身廊の横断アーチや側壁の壁アーチを受け止めるピラストルには、さまざまな柱頭彫刻が付けられている。人魚 (セイレーン) やヘビなどが彫刻されているとされるが、現在では摩耗が進んでいて、はっきりとした輪郭は分かりづらい。東端のベイの、凱旋アーチに隣接する壁アーチを受け止めるピラストルの柱頭には、組紐文様の彫刻が施されている。組紐は 3 本 (3 条

中川久嗣

線) からなり、外側に向けて広がる角も見える。カロリング様式の記憶を彷彿とさせるものである。後陣は半円形で、歯車文様と円筒形のモールディングが水平に巡る。その上には半ドームが載せられており、その壁面は青く彩色されている。2014年までは凱旋アーチの下側に、やはり青い星が描かれていたが、現在それは見られない。なお20世紀末に行われた屋根の補強工事の際に、マルタ十字を型取った円形墓石が見つかっている。十字の上のアーム部分には三角形の組紐文様が彫刻された珍しいものである。



30.3.5 Saint-Vincent de Broussan

Bibliographie :

Bardy et al. (1966) p.17; Buholzer (1962) p.129-131; Clément (1993) pp.288-290; Morel (2008) pp.55-56; GV.

Web-site : Base Mérimée (Saint-Vincent de Broussan)

略記号と参考文献

各聖堂のビブリオグラフィでは、文献などは和書、欧文文献（ファーストネームは略）、GVとRIP、Web-siteの順に記した。

新カト: 『新カトリック大事典』 学校法人上智学院・新カトリック大事典編纂委員会、研究社、1996-2009年。

AR : *L'Archéologue*.

CAF : *Congrès archéologique de France*. Paris, Société Française d'Archéologie.

CAG : *Carte Archéologique de la Gaul*.

GC : *Gallia christiana*.

GV : Guide de Visite.

ML : *Midi Libre*.

RIP : Renseignements ou Informations sur Place.

太田静六 (1989) 『ヨーロッパの古城—城郭の発達とフランスの城』 弘文館。

杉富士雄 (1992) : 『プロヴァンスの海と空—歴史と文化の旅』 富岳書房。

ジェイムズ、ヘンリー (1992) 『フランスの田舎町めぐり』 千葉雄一郎訳、図書出版社。

ストラボン (1994) : 『ギリシア・ローマ世界地誌 I』 飯尾都人訳、龍溪書舎。

瀬原義生 (1993) : 『ヨーロッパ中世都市の起源』 未来社。

- 伝カリストネス (2020) : 『アレクサンドロス大王物語』 橋本隆夫訳、ちくま学芸文庫。
- マール、エミール (1996) : 『ロマネスクの図像学 (上)』 田中仁彦ほか訳、国書刊行会。
- Aigon, Honoré, Abbé (1932) : *Nîmes, son histoire, ses monuments*, Montpellier, Imprimerie de Pierre-Rouge.
- Aptel, J-C., et al. (1995) : *La cathédrale de Nîmes aux tournants de l'histoire*, Nîmes, Comité du IX ème centenaire de la cathédrale de Nîmes.
- Barbut, Frédérique (2010) : *La route des abbayes en Languedoc-Roussillon*, Rennes, Éditions Ouest-France.
- Bardy, Benjamin, et al. (1966) : *Dictionnaire des Églises de France, IIc, Cévennes Languedoc Roussillon*, Paris, Robert Laffont.
- Bernet, Daniel (1984) : *Guide de la France avant La France, Sites et musées de la préhistoire à la civilisation gallo-romaine*, Paris, Pierre Horay.
- Boudin, J. Abbé (1887) : « La chapelle du château de Beaucaire » dans *Bulletin du Comité de l'art chrétien (Diocèse de Nîmes)*, vol. 22, tome 3, pp.353-388.
- Bromwich, James (1996) : *The Roman Remains of Southern France, A Guidebook*, Routledge.
- Buholzer, Jean-François (1962) : « Notes sur quelques églises romanes du Gard », dans *Annales du Midi*, tome 74, no.58, pp.121-137.
- Cabrol, Fernand et Leclerc, Henri, dir. (1935) : *Dictionnaire d'archéologie chrétienne et de liturgie*. tome 2, 1er parti, Paris.
- Carraz, Damien (2014) : « Templar and Hospitaller Establishments in Southern France: The State of Research and New Perspectives » dans *Archaeology and Architecture of the Military Orders, New Studies*, Mathias Piana and Christer Carlsson (ed.) , Routledge, pp.107-131.
- (2020) : *L'ordre du temple dans la basse vallée du Rhône (1124-1312)* , Lyon, Presse universitaire de Lyon.
- Carraz, Damien et Mattalia Yoan (2016) : « Images et ornement. Pour une approche de l'environnement visuel des ordres militaires dans le Midi (XIIe-XVe siècle) » dans *Images et ornements autour des ordres militaires au Moyen âge*, Damien Carraz et Dehoux Esther (dir.) , Toulouse, Presses universitaires du Midi, pp.47-68.
- Celié, Marc (2000) : « Nîmes : Amphithéâtre » dans *CAF (1999, Gard)* pp.513-515.
- Clément, Pierre Albert (1993) : *Églises Romanes oubliées du Bas Languedoc*, Montpellier, Les Presses du Languedoc.
- (2015) : *La Via Domoitia, Decouverte d'une voie antique des Pyrénées aux Alpes*, Rennes, Éditions Ouest-France.
- Conard, Serge (1979) : « Beaucaire. Notre-Dame des Pommiers » dans *CAF, année*

- 1976, *Pays d'Arles*, pp.99-113.
- Contestin, Maurice (1973) : « Le château de Beaucaire » dans *Bulletin Monumental*, tome 131, no.2, pp.129-136.
- Contestin, Maurice et Michelozzi, André (2010) : « La chapelle du château de Beaucaire: construction comtale ou royale ? » dans *Beaucaire, carrefour de l'histoire*, Daniel Roche et al., Toulouse, Éditions Privat, pp.129-151.
- Crozet, René (1937) : « Le voyage d'Urbain II en France (1095-1096) et son importance du point de vue archéologique » dans *Annales du Midi*, tome 49, no.193, pp.42-69.
- Darde, Dominique (2000a) : « Nîmes : Maison Carrée » dans *CAF, Gard, 1999*, pp.515-517.
- (2001b) : « Nîmes : Augusteum » dans *CAF (1999, Gard)* , pp.517-520.
- (2005) : *Guide Archéologiques de la France, Nîmes antique*, Paris, Éditions du patrimoine.
- Darde, Dominique et Lassalle, Victor (1993) : *Guide Archéologiques de la France, Nîmes antique*, Paris, Ministère de l'Éducation nationale et de la Culture.
- Droste, Thorsten (1990) : *La France romane*, Paris, Les Éditions Arthaud.
- Dupont, André (1942) : *Les cités de la Narbonnaise première depuis les invasions germaniques jusqu'à l'apparition du Consulat*, Nîmes.
- Erlande-Brandenburg, Alain (1976) : « Le cloître roman du prieuré de Beaucaire » dans *Bulletin Monumental*, tome 134, no.2, pp.137-138.
- Germain, M.A. (1838) : *Histoire de l'église de Nîmes*, tome 1, Nîmes, Libraire-Éditeur Giraud.
- Germer-Durand, Eugène (1868) : *Dictionnaire topographique du département du Gard*, Paris.
- Goiffon, Etienne (1881) : *Dictionnaire topographique, statistique et historique du diocèse de Nîmes*, Nîmes.
- (1901) : *Monographie religieuse de la ville de Beaucaire*, Nîmes, Imprimerie Lafare, Ducros cousins.
- Gouron, Marcel (1938) « La cathédrale romane de Nîmes » dans *Bulletin d'histoire et d'archéologie de Nîmes et du Gard*, no.4, 1936-1937, pp.35-53.
- Jacquet, Auguste et Cestin, François (1977) : *Beaucaire*, Beaucaire, Imprimerie Pueyo.
- Lassalle, Victor (1978) : « Sculptures romanes remployées au chevet de l'église Notre-Dame-des-Pommiers à Beaucaire » dans *École antique de Nîmes*, Bulletin annuel, Nouvelle série no. 11-12-13, année 1976-1977-1978, pp.143-164.
- (2000) : « La cathédrale Notre-Dame-et-Saint-Castor de Nîmes » dans *CAF (1999, Gard)* , pp.145-166.
- (2010) : « Le souvenir de la Vierge romane de Beaucaire à l'église

- Saint-Paul de Nîmes » dans *Beaucaire : Carrefour de l'histoire*, Daniel Roche et al., Toulouse, Éditions Privat, pp.101-110.
- Lombard, Olivier, et al. (1974) : *Beaucaire, notes historiques et archéologiques*, Beaumes-de-Venise, Éditions Française de Publicité.
- Lontcho, Frédéric (2000) : « En cheminant sur la voie » dans *AR*, no.47, avril-mai, p.16.
- Mazier, Pierre (1990) : Jonquières-Saint-Vincent dans la Costière de Nîmes, Nîmes, Éditions C. Lacour.
- Ménard, Léon (1744) : *Histoire civile, ecclésiastique et littéraire de la ville de Nismes avec les preuves*, tome 1, Paris, Hugues-Daniel Chaubert Libraire.
- Michelozzi, André (2002) : *La Voie Domitienne entre Beaucaire et Nîmes*, Beaucaire, Éditions de la SHAB, pp.22-25.
- (2004) : « L'église romane Saint-Laurent à Jonquières-et-Saint-Vincent » dans *Archéologie du Midi médiéval*, tome 22, pp.27-44.
- (2007) : « L'église Saint-Pierre-de-Camppublic à Beaucaire (Gard) » dans *Archéologie du Midi médiéval*, tome 25, pp.19-34.
- (2008) : « L'église romane Saint-Jacques-de-Saujan (Gard) » dans *Archéologie du Midi médiéval*, tome 26, pp.225-230.
- Moreau, Marthe (1997) : *Les châteaux du Gard du moyen âge à la Révolution*, Montpellier, Les Presses du Languedoc.
- Morel, Jacques (2008) : *Guide des Abbayes et Prieurés en région Rhône-Alpes*, Lyon, Éditions Autre Vue.
- Nougaret, Jean et Saint-Jean, Robert (1975) : *Languedoc roman*, Saint-Léger-Vauban, Zodiaque.
- Pelletier, André (1993) : *La civilisation Gallo-Romaine de A à Z*, Lyon, Presse universitaire de Lyon.
- Pérouse de Montclos, Jean-Marie, dir. (1996) : *Languedoc-Roussillon, Le guide du patrimoine*, Paris, Hachette.
- Ribera-Perville, Claude (2013) : *Chemins de l'art roman en Languedoc-Roussillon*, Rennes, Éditions Ouest-France.
- Rivet, A.L.F. (1988) : *Gallia Narbonensis, Southern Gaul in Roman Times*, London, B.T. Batsford Ltd.
- Roche, Jean (1979) : « L'abbaye de Saint-Roman de l'Aiguille » dans *CAF (l'année 1976, Pays d'Arles)*, pp.114-125.
- (2009) : *L'abbaye de Saint-Roman et les ermitages troglodytiques du massif de l'Aiguille*, Beaucaire, Société d'Histoire et d'Archéologie de Beaucaire.
- Schmidt, Victor M. (1995) : *A Legend and Its Image : The Aerial Flight of Alexander the Great in Medieval art*, Groningen, Egbert Forsten.
- Stoddard, Whitney S. (1973) : *The Façade of Saint-Gilles-du-Gard : Its Influence on French*

中川久嗣

*Sculpture*, Middletown, Wesleyan University Press.

Thirion, Jacques (1979) : « La frise de Notre-Dame-de-Pomier à Beaucaire » dans *CAF, année 1976, Pays d'Arles*, pp.522-534.

Varène, Pierre (1992) : *L'enceinte gallo-romaine de Nîmes : Les murs et les tours*, 53e supplément à « Gallia », Paris, CNRS Éditions.

Web-site

Abbaye de Saint-Roman par Paul Courbon

<http://www.chroniques-souterraines.fr/dossiers/view/saintroman.html>

(2022.11.10 アクセス)

Amis de Bernis

<https://lesamisdebernis.org/fr/> (2022.10.10 アクセス)

Base Mérimée (Bernis)

<https://www.pop.culture.gouv.fr/notice/merimee/PA00103025> (2022.10.1 アクセス)

Base Mérimée (Chapelle Saint-Lourent, Jonquières-Saint-Vincent)

<https://www.pop.culture.gouv.fr/notice/merimee/PA00103063> (2022.11.10 アクセス)

Base Mérimée (Chapelle Saint-Pierre-des-Rives, Beaucaire)

<https://www.pop.culture.gouv.fr/notice/merimee/PA00102979> (2022.10.20 アクセス)

Base Mérimée (Site archéologique de Saint-Roman d'Aiguille)

<https://www.pop.culture.gouv.fr/notice/merimee/PA00103018> (2022.11.5 アクセス)

Base Mérimée (Saint-Vincent de Broussan)

<https://www.pop.culture.gouv.fr/notice/merimee/PA00103024> (2022.11.5 アクセス)

Nemausensis

<http://www.nemausensis.com/> (2022.10.1 アクセス)

Site officiel de la Mairie de Beaucaire

<https://www.beucaire.fr/> (2022.11.1 アクセス)